古いのか、古いのは婆の事で新らしいのは小さい婢のこッたよ、中古は誰の事だらうね、はッはッはッ」

をり〳〵床しけれど淋しげに琴の音の漏れし此家も、今は陽氣に絶えず無遠慮なる笑ひ聲の漏るゝ家となりぬ、

其十七

春の風情は朧月夜にありといへど、春の生命は白日青天の櫻花爛漫、加之も花の滿開は櫻の專用語となりて、上野は猶更ら滿都雅俗の集合點となりぬ。その上野に續いて櫻に近き初音町、春に浮かれて花に誘はれずとも、これを殆ど日課の如く二時間の散歩に出でし廣行、こつ〳〵とステッキの先に地を叩きながら、のッそりと歸り來る筈の足音を、いつにない今日に限りて俥の楫棒、がたりと門口に卸すや否、其まゝ急いで飛び込みぬ、

「キタ、汝すぐに著物を著替へろ　ちよいと頭髪を、ぐづぐづするな、急いで急いで」

「おや、何事で御坐いますの」

「何事ぢやアない、はやく仕ろ早く、今、上野を散歩してるとね、父に逢ッた」

「あら」

「お父樣が三四人の親しい方と精養軒から出られたところで、乃公を見るとね、實に相濟まンよ其人達に別れて只お一人、御自分の馬車も歸して仕舞ッて、ある茶店に居られる、そしてキタ、汝を連れて來いと、ね」

「はゝはい、どう致しませう」

「かういふ時でないと、お目にかゝれない、早く、はやく仕ろ早く」

其まゝ駈け付けても、父の眼より我子の妻としては一點の瑕瑾なく恥かしからぬ女、滿都の衣香扇影を集めたる花の下にも歩を停めて振返らるゝ筈の美人、されど今日は、されど其身の心には、急いて促す廣行も、實は思ふ存分に身を作らせたく、急いで促さるゝキタ女も、この後は知らず今日これが生涯一度の始めと思へば、片時の暇を潰すも勿體なけれど、また片時の暇も惜しき心地、鏡に對うて手早く束髪の亂れを搔き上ぐる背後に立ちて、これか〳〵と頻に幾枚となく簞笥より引出だす廣行、かゝる事をさせます筈の人でないと、嬉しいやら悲しいやら妻の涙、鏡に寫れば、ちらと見て良人も思はず涙、

いふまでもなき白襟に、黑羽二重の重ね袷を取り上げしが、斯くならぬ前より人しれず、松川家の五つ紋、憚りて良人の顏を見返れば、それで構はぬと無言の首肯、あまり目立たぬ帶に殊更ら帶止の金細工とダイヤモンドの指輪を取外

し、涙の目を拭うて、あはれに優しけれど心强く、すッと立ちし姿は名花一輪水際を放れしが如し、

廣行が待たせし車夫を走らせて別に一臺、二臺を聯ねて初音町を駈け出しぬ、

知らぬものゝ下司言葉には、畜生と叫ばるゝ夫婦一對、

俥は博物館の前に乘り捨てゝ花盛り人盛りの中を縫へど、花にも人にも心なく、あの茶店の奥にといふ、いはれしキタ女は今更に胸の轟き、さのみ熱からぬに額の汗、そッと拭ひぬ、

廣行まづ入りて二三分の後、顏を差出して無言に招けば、花神の脫け出でたるが如く此方に佇みし身を運びて、

父の廣通は今年六十二、赤く禿げ上りし丸額に白く長き髮、流石に今の華族でなく生れし種より大名生育の老顏、どこやらに自然の品位ありて、加之も目許の深き皺に慈愛を含み、羽織袴の常著に馴れたる大樣さ、伏目勝の中腰に入り

來るキタ女を一目、ちらと見て、

「さア、こゝへ來るが宜い」

こゝへといふ、そこにも坐せず、廣行の後邊に身を縮めて、兩手を支へし上に雪の額、堪へ兼ねてや聲は曇れり、

「まことに、申譯のない、女で御坐います」

この一言は廣行の身に取りて七年越の總てを打消すべき力あり、この一言は我身に取りて千言萬語を盡すよりも强き力あり、この一言は父の廣通をして過去一切の疑念を解かしめ行末また捨て難き我子の妻として何物の言葉も容れざらしむる力あり、ただ申譯のない女とは、いかにも優しく生れし才女、いかにも哀れに生れし美人、才色兩全かゝる女を何とて今まで日蔭に隱せしかと、口にいはねど父の心、廣行を顧みて、

「幾歳になる」

「あけて、二十六になります」

「どこで生れたね」

「やはり、東京で御坐いますが、いろ〳〵と不幸な事情がありまして、よほど運わるく出來た女で御坐います、今日お父樣の、お目にかゝるとは本人、夢にも思ひませン事で、ありがたく存じて居ります、キタ、よく御禮を申し上げて置け」

「いや、禮なンかに及ばない、廣行は乃公の子で、別に不都合あッて出したものでないからね、汝も、他人のやうに思うて居らンぞ、かういふ我まゝもので嘸、困る事もあらうが、世話をしてくれ、いつまで其まゝでは捨て置かない、乃公が逢うた以上また、乃公に思慮がある」

「恐れ入ります、かやうな不束女で」

「またね、乃公が來るよ、乃公の方から一度、汝達の家を見に行かう、しか

し今日は此まゝ廣行、もう歸る」
「お歸り、馬車が御坐いませンで、お俥をキタお俥を汝」
「はい」
「いや〳〵、上野を下りて、乃公が乘る」
キタ女まづ立ちて胸帶の間より一圓紙幣三枚、そッと茶代に取らせ、父子が歩む背後より從ひ行きしが、幸ひ清水堂の下に見苦しからぬ俥二臺を見付けて、會釋しながら小走りに駈けぬけ、一言二言、車夫を驚かせし賃錢の先拂ひ、中腰に振返りて、
「これへ申し付けまして御坐います」
楫棒の左右に夫婦の下げし頭、車上の父は今更に兩眼の涙、俥のけ出すや否、
「お見送り致してまゐります」
殘る一臺に其まゝ乘り込みしキタ女、

「あの俥に付いて、あまり近かないやうにね」
これも不意の上客と見て其まゝの韋駄天、
九段阪を上る時、父の廣道、ふと心付いて、番町の屋敷へは門内に引入れず、わざと門前に降りて振返れば、あはれや彼方の辻に立ちて靜に目禮の姿、

いはゆる藝妓あがりの仇めしき女かと思ひの外、いはゆる妾風の艶きし女かと思ひの外、また當世風の眼鏡越に鼻頭の學問臭き女かと思ひの外しッとりとせし中に疎からぬところあり、いぢらしく哀れげの中に雄々しきところありて、あれだけの美貌を備へ、あれだけの禮儀作法を心得、この我を見えがくれに屋敷の辻まで送り屆けて、振返れば靜に目禮の姿、けふ始めて逢ひし老の寢覺に猶更ら忘れ難し、

餘所ながら風聞の耳に入りし時は、我子のため花柳の巷よりも罪深き隱れ家、まして廢嫡問題の裏面には猶更ら憎き女とのみ思ひしに、

其十八

雜踏の俗を嫌ひ社會の風塵を避け人生の波瀾を恐れて、無用の神經衰弱に青白き半病人となるべき廣行でなく、寧ろ春に浮かれ花に狂ふ滿都の群集に一種の興味を持ちて、また今日も例の如く上野の散歩、身輕の著流しに食後の重き腹を撫でながら、ぶらり〳〵、

竹の臺の廣場に無邪氣なる小學兒童の運動會を見て、おもはず我も昔に返りし心地、摺鉢山の下に泥醉漢の喧嘩を巡査に引かれ行く最後まで見屆けて、今更ら人間の馬鹿さ加減に呆れ、加之も日曜の人出に織るが如く、今日を一年一度の晴れとせる腰辨先生の細君携帶に却ッて敬意を表し、正體の得しれぬ白粉臭い女を連れて此上野を我物顔の遊治郎に齒を浮かせ、あたり構はぬ職人の天眞爛漫を愛し、商人の月にも花にも算盤珠を忘れぬ眼付に感じ、田舍者の口を開いたところ面白く、白髮の爺も婆も老の腰を伸せしところ嬉しく、男女學生の風俗いづれも年々歲々の流行を逐ひ行くに驚きながら、ぶら〳〵と歩む前面より一際すぐれて目立ちし華奢なる洋服二人、みれば兼て知る子爵と男爵の祕藏息子、平民どもに立交りしといふ顏色あり〳〵と顯はして、

こいつ面白い奴が來たぞと、廣行、わざと避けて二人を遣り過しながら、背後より俄に大聲、加之も殊更に子爵と男爵の呼聲、

「子爵の大井君、男爵の川島君」

はッと驚いて振返れば、つか〳〵と近寄りし廣行、

「お大名の若殿樣お二人で今日は上野の、お花見ですかね」

同族間に聞ゑたる松川家の變り者、わるい男に見付けられたと思へど、まさか今は廢嫡の君ともいはれず、いへば却ッて猶更の面倒、腫物に觸るが如し、

「これは、松川さンですか、その後は暫時お目にかゝりませンが、相變らず御壯健で」

「相變らず身體だけは壯健ですが、定めし御承知の筈だ、その後は大に相變ッて、いよ〳〵叩き出されましたよ、はゝゝゝ」

「事情は少しも知りませンが、實は我々も、聞いて驚きました、いづれ何か理由があッて、つまり一時の事でせうが」

「なアに理由の上でも事情の下でもなく、はッきりと此まゝ永久の廢嫡さ、はゝゝゝしかし花見に家事は禁物、どうですな、もとの馴染として隨行を命ぜられたい、花見の濟ンだ後は、どこへ行かれる」

「いや、どこといふ、的はありませンが、たゞ二人で」

「たゞ二人は呵しい、たゞの字が怪しい、どッかへ美なる伏兵を置いてあるンぢやアありませンかね」

「はゝゝゝ全くの二騎です」

「二騎、まさか古風に白馬金鞍の公子でもあるまいし電車では無論なし、馬車ですか、自動車ですかね」

「なか〳〵激しい追擊ですな、今日は他に用がありましたから自動車で來ましたよ」

「はゝア自動車ですか、この花を見る間、どうせ一時間や二時間は、かゝるでせう、無駄に待たして置いても無料でないとすれば入らざる不經濟ですな、ちよいと僕に貸して貰ひたい」

「どこぞ、御用でもありますか」

なアに別段、どこへも行きませンが、家を出された廣行、もう再び乘る機

會もありませンから幸ひ、御迷惑でも一時間か三十分ほど、乘り終めに乘ッて見たいですよ、人間といふものは意地の悪い妙なもンでね、食へないと思へば猶更ら食ひたいのと同じこッた、はゝゝゝ」

かう言ひ出した以上、もし嫌といへば、それ以上に必ず難題を持ち出す男、まして今は廢嫡の身に心も癖めば、うか〳〵跳ね付けられぬ相手、今日の災難と諦めて、

「實は我々、すぐに歸りますからね、どうか二三十分で」

「ありがたう、二三十分で結構です、しかし運轉手の顏を知らないから、甚だ相濟まない御苦勞ですが、自動車のあるところまで」

どうしても免れぬ場合、しぶ〳〵二人とも後へ戻りて、待ち受けし運轉手に向ひ、

「この方を十三十分、乘せてくれ、そして濟めば、やはり此處へ來て待ッて

居るンだぜ、ちやア松川さン、御遠慮なく」

「や、失敬、暫く拜借します」

二人の立去りし後、まづ運轉手に三圓を摑ませて、其まゝいづれへか行きしが、やがて伴ひ來りしは職人體の醉ッ拂ひ三人、加之も最も見苦しき襤褸半纏に破れ股引の垢染みし眞ッ黑な奴を三人、

「おい、この三人を乘せてね、乃公も乘るが外へ行くに及ばない、上野の入口から博物館の前まで同じ道を何遍も往ッたり來たりすれば宜いンだ、いやな顏するな、富豪や華族ばかり乘せて居ちやア冥加が惡い、をり〳〵人を轢ッ殺すだらう、罪亡ぼしだ、さア三人とも遠慮なく大きな面して乘ッた乘ッた、乃公が借切ッた自動車だ錢は入らないぞ、後で此方から飲料を遣るぞ」

あッと驚きし運轉手も今更ら三圓の祝儀を返しも出來ず、ぐづぐづすれば三人

の醉ッ拂ひを唆して袋叩きに仕兼ねまじき勢ひ、帽子を面深に半泣きの澁面を隱しながら、ハンドルを取れば空を走るが如し、

「どうだ三人とも、いゝ心持だらう」

「だゞ旦那ア、どうも堪りませンねエ、わッしなンかア常に自動車を目の仇敵に思ッてるンですよ、不意に人を嚇しやアがッて、ぶう〳〵臭エ屁を垂れて、しかし自分が乘ッて見ると、あンまり癪にも觸りませンねエ、おい兄弟、どうだい」

「おらア夢のやうだ、これで道の知れねエ遠くへ此まゝ持ッて行かれりやア生膽でも取られるンだが、左の樹の間から不忍の池を見て右に花を見て、おッと博物館、逆戻り今度は反對だい、早いもンだなア、やア有象無象が驚いて居やアがるぜ、どンなもンでエ畜生、誰か知ッてる奴に逢ひてエなア」

「旦那ア、わッしやア今年三十六ですが、かういふ事があッちやアこれが馬鹿運の向き始めで、四十の年までにやア家貧の滯らねエ人間になるかも知れませンね、ありがてエ、もし山の神でも見やアがッたら氣絶するだらう」

「馬鹿運の向き始めなら宜いが、馬鹿運の向き仕舞ちやア今夜、頓死するかも知れねエぜ」

「頓死でも變死でも構はねエ、この世に思ひ置く事さらに無しだ、もし死んだら石塔の眞正面へ自動車に乘ッた事を彫込ンでくれ、たのむぜ」

「しかし旦那ア、旦那ア全體、どこの御方樣で居らッしやいますい、わッし等のやうなもンを自動車に乘ッけて、花見をさして下さるたア」

「はゝゝゝなか〳〵面白い連中だな、さアこれで往復十遍だから降りた降りた、降りてね、また代りに誰か引張つて來い、乞食でも何でも構はない、もし乞食なら一人前に一圓づゝ遣るぞ、探して來い、探して來い」

子爵と男爵の二人、頻に時計を見ながら三十分の後に來て見れば、四人の乞食を乘せて上野の入口より博物館の前まで同じ一筋の道を往つたり來たり、その兩側には黑山の如き見物の人垣。そら來た、また來たと前を通る毎に百雷の如き拍手喝采、わッわッといふ大騷動、

開いた口が塞がらぬとは實に此事なり

四人の乞食を自動車に乘せて上野滿山の花見客を驚かし、あまりの事に怒りも得せず呆れ果てし二人に失敬の一語を殘して、くつ〳〵と笑ひながら其まゝ飄然と立歸りし廣行、妻の前には澄ました顏、

「今日は少々、いつもより運動を仕過ぎて遲くなッた、あゝ草臥れた」

「遲くなッたでは御坐いませンよ、今日に限ッて、まア何といふ折の惡い事、

良人、お父樣が」

「え、父が、來られたのか」

「有難い事で御坐いますねエ、わざ〳〵良人、かういふところへ、過日、上野で御意を得まして、まだ一週間も立ちませンに」

「やはり親だね、第一、汝が、よほど氣に入ッたらしいが、來られるにしても、いろ〳〵屋敷の者どもへ氣兼をせられたらうに、お俥でか」

「いゝえ、その邊までは、お俥に召して入らしッたさうで御坐いますが、御徒歩で、妾は、たゞもう涙ばかり出まして」

「何か、さし上げたかね」

「別に何も入らない、茶の心得はあるかと仰せられまして」

「そりやア宜かッた、お父樣より汝のために何より宜かッた、汝には一番の藝だからね、父も茶人だ、無論お譽めに預ッたらう」

「はい、そして良人の事を、委しう、お聞き遊ばしましたよ、妾も、なまじい繕うては却ッて宜しくないと存じましたから何事も隠さず、ありのまゝに申し上げました、お湯殿で獨相撲の事を良人、横になッて、お笑ひで御坐いました」

「はゝゝゝ馬鹿な、つまらない事を汝、はッはッはッ、何といはれた、呵しくて堪らない時は、すぐ横になられる癖があるンだよ、はゝゝゝ」

「しかし良人、勿體なう御坐いますよ、よく良人を御存じで居らッしやいますよ、廣行は家を嗣がすよりも家を出した方が本人のためになる、成敗は兎も角、大きいところのある奴ぢやと」

「むゝそうか、や、それで安心した、そこまで乃公を見て居て下さりやア、實に乃公も本望だ」

「そしてね、そして妾に」

「汝に何と、いはれた」

「これだけは、申し上げません」

「おい〳〵乃公に、いへない事があるか、何か父が汝に」

「ほゝゝゝ」

「はゝア、わかッた」

「わかれば、あてゝ御覽あそばせ」

「いや、わかッたが乃公の方も、いはない」

「では妾から申します、お父樣が、妾に、ほゝゝやはり止しませう」

「やはり止す、急にいへないほど、好い事と見えるな」

「好い事では御坐いません、この事は良人も、お惡いのですもの」

「乃公が惡い、ます〳〵變だな」

「だッて良人、お父樣が、妾に、なぜ子を生まぬかと」

「はゝゝゝ何だ、そんな事か、なるほど半分は乃公も惡いね、はゝゝゝ」

其十九

廢嫡以來、番町の我屋敷へは影も見せざれど、其後こゝに始めて青山の西田家を訪ひし廣行、主人の伯爵と奥の一室に差對ひながら、

「いろ〳〵と有難う御坐いました、その後お禮かた〴〵是非、伺はねばならない筈ですが、却ッて御迷惑と心得、わざと差控へて居りました。また月月お屆け下さいまして」

「いや、此方からも一度、訪ねたいと思ッて居ましたがね、つい御無沙汰をして、しかし、どうですな、屋敷に居られる時よりは萬事、氣樂でせう」

「氣樂か何か、兎も角、かういふ身輕の境涯が分相應で、よほど自分の性に合ッてるやうです、どう考へても華族に生れたのが、生れ損ひで、大間違ひだッたらしう思ひます、はゝゝゝ」

「なるほど、廣行さンの氣では、さうだらう、ところで毎日、何を仕て居られる」

「ぶら〳〵遊ンで居ります」

「たゞ遊ンでも居れまいに、書物でも讀ンで」

「本は讀みます、勉强といふやうな、つまらない不自然な事は第一に馬鹿げて居るのみならず、うか〳〵すると知らず識らず學者になる恐れがありますから、なるべく氣を付けて學問の中毒しないやう、つまり肩の凝らない程度に讀ンで居ります、はゝゝゝ」

「相變らず皮肉だ、皮肉といへば、聞きましたせ、この春、上野で、乞食を白動車に乗せて花見を仕られたさうですな、はゝゝゝその大井が來て、い

やはや、呆れ返るより寧ろ恐れ入ッて居た、はゝゝゝ」

「あの二人は馬鹿ですよ、あゝいふ沒理漢が華族にあるから華族の評判が善くない、外の時と違ッて一年一度の花でせう、この花を觀たいため夜も晝も砂埃の汗水に働いて、今日ばかりを生命の洗濯に人生無上の快樂を極めてる中へ、自己の力でもなく生れながら人生特殊の境遇を持ッた奴が、ぶう〳〵臭い煙を吐いて自動車で乘り込むとは、衆と共に樂しむべき場處がらを辨へざる暴慢無禮で、けしからン振舞ですな、彼等ァ上野に何の用がありました、いかなる大切の急務がありましたらう、もし風流の點から論じても、何事ぞ花見る人の長刀で、今日の自動車ほど花に配合の惡い不適當な厄介物はありますまい、第一は花神に對しても恐れありだ、加之も彼等、をり〳〵人を轢ッ殺したり怪俄をさしたりしますからね、幸ひ乞食を乘せて平生の罪亡ぼしを行はせてやッたンです、それを不足いふとは言語

道斷な奴、まだ乞食を乘せたまゝ屋敷へ送り込まれなかッたのが彼等の僥倖ですよ、はッはッはッ」

子爵家の相續人たりし今までとは違うて、何物にも憚らざる傍若無人、そろそろ本領の一端を現はしかけし意氣軒昂、迚も當るべからざる勢ひに、流石の西田伯も聊か恐れ氣味の眞正面より、隙もあらせず斬込みし廣行、

「しかし他の事は置きませう、これから廣行お願ひが御坐います、甚だ突然ですが、どうか三千圓、お貸し下さりますまいか」

「三千圓、よろしいとも、つまり六萬圓は預ッてあるのですからね」

「いや、別に三千圓、御當家から拜借いたしたい、あの六萬圓は生活の基本金として、親戚協議の上お預け申したので目下の境遇に應じた月々の利子を頂戴する外、一文たりとも手は著けませン、また手を著くべき性質でなく、もし廣行が其内の幾何をと願へば、お叱りを蒙る筈の金と心得ますか

ら、どうか、お手許の三千圓」
「いかにも、その點は惡かッた、ところで三千圓・何に入用です」
「願はくば只、何の御言葉もない金だけの三千圓を拜借いたしたい、たゞ廣行に三千圓お貸し下されたい・もし費途を委しう聞かれた上で貸してやらうといふ思召ならばそれを、聞かずに斷然、おことはり下さい」
六萬圓に就て既に一本、まゐられた上の三千圓、加之も以前の廣行よりは何となく勢ひの異なれる點に打たれし西田伯、
「よろしい、よろしい、三千圓」
「有難う御坐います、今年の十月には、必ず御返濟いたしますから」
「なアに十月と限ッた事はない、もし都合が惡ければ其まゝでも差支ありませンよ」
「只今が五月、や、相違なく十月に持參いたします、わづか三千五千の金で

一日たりとも返濟の期限を間違ッてほ廣行、あまり自分ながら小さ過ぎて生涯の計算上、よほどの損になります、同じ間違ふくらゐならば、せめて五十萬とか百萬とか、それにしても金だけでは、少々、惜しいやうな氣がして、間違ひ兼ねますなア」

車輪に注ぐ一滴の油は恐るべき大運轉の原動力となるべく、衣食住の生活以外、嗜好物の費用以外、この三千圓を隻手に握れる松川廣行、物凄き冷笑を浮べながら、いよ〳〵何等かの期するところありて、或意味に於ける流血淋漓の戰場、その激烈なる活社會の中央へ飛び出ださむとす、
金は僅に三千圓なれど、彼の頭腦を以ての三千圓、彼の大膽を以ての三千圓、彼の奇才縱横を以ての三千圓、彼の動かすべからざる主義と本領を以ての三千

圓、そも〳〵いかなる三千圓の價値ありや、そも〳〵いかなる購買物を得べきや、

一家三四人、贅澤さへせずば、これで衣食住の顧慮なき六萬圓の生活費を鼻糞とも思はざる廣行、他人の眼よりは泥溝へ捨てるか川へ叩き込むか費途の分らぬ三千圓を出陣の武具として、いよ〳〵活社會の戰場に突貫せむとするところ、正に本人の本領を遺憾なく顯はしぬ、

されど家に歸れば例の調子、最愛の妻が手料理に夕飯の舌鼓を打ちながら、

「ねエ、おい、世の中ア何故、かう馬鹿が多いだらう、氣狂ひ馬の尻ッぺたを鞭で叩かれるやうに晝も夜も走り廻ッてるかと思へば、案外つまらない事に暇を潰す奴ばかりだ、過日から電車へ乘ると電車用語の懸賞に、端の

方へ混合ッては互の迷惑だから、中程へ這入ッてくれといふ事の募集だが、募集の結果（どうぞ中程へ願ひます）これが當ッたさうだ、ところが（どうか中程へ願ひます）といふのもあッたので（どうか）と（どうぞ）の擇を、博士連中の研究に上したといふこッた、日本國體として外國人に對する用語でもなしさ、また文法の講釋でも語法の議論でもないに、はッはッはッ、しかし世間には垢ぬけのした面白い奴があるよ、この募集中にね、かういふ酒落れたのがあッたさうだ（中程に美人が居ります）いかにも痛快だね、人を馬鹿にしてるが、たしかに今日の卑劣な人情を穿ち得て妙だ、もし乃公なら更に一歩を進めて、中程に金が落ちてあります）どうだね、はゝゝゝ車掌この一聲を出せば、兩端に混合ッた人間、ぞろ〳〵と一時に中へ押込むせ、また吝で臆病で膽ッ玉の小さい今日の人間だから（兩端に攫徒が居ります）これでも汝、慌てゝ懷中を押へたまゝ一時に中央へ混合

ふぜ、しかし兩端に居る人間が怒るだらう、はッはッはッ」

笑ひながら無遠慮の大口を開いて、凡そ世間普通の比較に三人前の常食、膽玉のみならず胃袋も人並よりは勝れて大きい男なり、

前編（終）

後編

秋は深くして燈下に親むべき時、まじめの讀書に力めずして、いたづらに閑文字を弄し、いたづらに有用時を費し、いたづらものの後編を著せり、前編のいたづらは惡戯にして後編のいたづらは徒らなり、されど閑に繁あり無用に用ありとすれば、いたづら亦その間に多少のまじめなしともいふべからず、

一樹春風千萬枝
嫩於金色軟於絲
永豐西角後園裏
盡日無人屬阿誰

後編

貧乏と苦勞が嫌で堪らぬといふものあれど、これは華族が嫌で堪らぬといふ松川廣行、

かせいでも働いても生活難の今日、手腕があッても學問があッても就職難の今日、いかに奮闘するも努力するも運命の神に憎まれては智恵も工夫も用に立たざる今日、そも〳〵祖先以來の餘慶に寢て居て食へる華族が何のために嫌で面倒かといへば、その理由よりも我この性質に於て只かくの如しとは、やはり世間に對して辯解の面倒を省き申譯の手數を嫌がる本人の捨言葉、強ひて問へば、蟲が好かぬと空を嘯く、

顔色蒼ざめて十年の苦學に猶いまだ下宿料の催促を防ぎ兼ねたるものゝ眼より今この松川廣行を見れば、つまり世間しらずの罰當りなり、あたら學士の肩書に卵子の折函を添へて走り廻るものゝ眼より今この松川廣行を見れば、つまり大名種に生れし我まゝ育ちの好奇心なり、さらに同族の朋友間より今この松川廣行を見れば、みづから進ンで廢嫡せられし狂氣沙汰、加之も子爵の名譽と財産とを一人の女に振代へし馬鹿者なり、

されど本人の廣行、ふゝンと鼻の頭に輕く笑うて曰く、醫者は死體の解剖すれど、生きた乃公が、彼奴等のために解剖されて堪るものかと、

松川家は子爵中の第一、全華族を通じても恐らく五本の指に數へらるゝ富を有して、堂々たる練塀に圍まれ魏々たる和洋折衷に築かれたる中六番町の屋敷も我より進ンで廢嫡を迫りし廣行の心には、今この上野の森影に借屋住居の簡易生活、いかに人生の趣味深きぞ、殆ど一種の囚はれより脱れ出でたるが如く、いち〳〵出入の大玄關に送迎せられて道路に制限ある馬車や自動車に運ばるゝよりも、いたるところ自由自在に二本の健脚、もし勞れし時は四通八達の電車あり辻俥あり、家に歸れば不自然に平蜘蛛の眞似をする三太夫の面でなく、生涯を我ために捧げし最愛の妻が笑顔に迎へられて、夕飯の膳の上に眞心を籠めし手料理の一品二品、おもはず舌鼓を打ちながら誰憚らぬ談笑の境涯、いかに面白く樂しきぞ、

されど只これ一時の假住居に我身の置きどころ、きのふに勝る今日の趣味と快樂のみ、

松川廣行、もし此まゝの境涯に甘ンじて此まゝの快樂に終れば、いはゆる醉生夢死の徒、たゞ華族の子息が我まゝに家を飛び出して好いた女と其日其日を暮

らすのみの事、昔は風流の若隱居、今日は戀愛小説の口繪に等しげれど、この廣行が華族の門を出でゝ赤裸々の一平民となりしには、社會に對する存在の意味上、その平民となるだけの主義あり本領あり覺悟あり、加之も風流の若隱居とし戀愛小説の口繪としては、容貌性格、あまりに不似合なる大膽の細心と驚くべき案外の奇策縱横とを備へて、世の中の戰場に武者振ひの勢ひ、また餘りに鮮明すぎたる男、いづれにせよ、うき世を忍ぶ戀の宿かと思はるゝ今の境涯は、この松川廣行を容るゝに狹く小さく頗る不調和の背景なり、

たゞ廣行がために生涯を通じて遺憾なく調和せるものは、妻として良人に卅く朝夕のキタ女のみ、

名畫より脱け出でたるが如き天生の容色品位、たとひ其まゝ華族の夫人として も、つゝまやかに身を持ちて晴がましき虚榮に憧れぬ自然の性質、今この境涯に世話女房としても、いぢらしく哀れげの中に雄々しきと　ろありて物に動かぬ點は、もしや不幸の運命に落ち果てし曉その艱苦に伴ふ貞女の妻としても、

そもや十九の年より過ぎて還らぬ二十六の昨日まで、あたら花の色香を惜しまるゝ世間の春にも見せず、日蔭の埋れ木に捨て置かれし時さへ、をり〳〵通ひ來ませる君の姿を女一代の冥加として、世の一口に賤しき妾といへど、我は妻ある人に弄ばるゝ身でなく、妻なき人の戀に靡きし身、情は猶更ら名のみの冷き夫婦よりも暖に、いづこの誰をか羨むべき、いづこの誰に恥づべきぞ、此まの生涯を世に交はらずとも、君たゞ一人を萬人の力草とせしキタ女、まして今は晴れて妻と呼ばれ良人と呼ぶキタ女、

月も花も廣行たゞ一人に宿せり、戀も情も廣行たゞ一人に盡せり、身に飾る珠玉の光りも、世に競ふ榮華の誇りも、廣行たゞ一人に代へ難し、

このキタ女に良人とせらるゝ松川廣行は、社會に向うて志いまだ達せず力いまだ伸びざるも、天下幾萬の家庭に人しれぬ悲慘を含める今日、妻として理想

の妻は既に得たり、

萬事に重々しき極彩色の華族より脱し來りて、家風も形式もない上野の森影に閑靜なる初音町の假住居、老少の下女二人に夫婦たゞ二人の主從四人、親戚に保管せらるゝ六萬圓の五分利三千圓を月々二百五十圓づゝの生活費に當てゝ、春の花も秋の月も居ながらに見る氣樂さ、葉越しに漏れ來る夏の涼風を午睡の手枕に通はせ、樹々の稍に積る冬の雪を寒からぬ置炬燵に眺めて、浮世の萬人に誇るべき才色兩全の妻を持ち、おのが心のまゝなる書を讀み身を養ひ、誰に憚らず物に煩はされず天地たゞ我物の境涯、これで是以上の希望さへなくば、松川廣行、もはや人生に何の不足もなし、

されど今この境涯を殆ど一種の化石視して、人生に無意味とせる廣行がために

は、やがて蒼空へ飛ぶべき羽翼を休めて暫し假寢の巣なり、

其一

春の夕ぐれ、古風に花ちる入相の鐘の音は、芝の山内と今この上野に殘りてぶら〳〵と例のステッキを引き摺りながら歸り來れる廣行、

このステッキを引き摺る音と、こつ〳〵門口の敷石を二三度、輕く無心に叩く癖とは、人しれぬ戀に忍び來りし時も、外に家なくて歸り來る今も、待ち兼ねし身は、微妙の音樂、

はや入口の障子を開けて、飛び立つ心を靜に迎へ出るキタ女、ことし二十六といへど、知らぬものゝ眼には二十一二、いかに近寄りても三か四か、もし當世風の香紛に歳月を儉み取る人爲的の裝飾を施せば、すぎし十九の昔も今も同じ

美の神に包まれて、くッきりと冴え渡る肉色の頰に堪へられぬ微笑を浮べ、わざと作らず聊か太く濃き眉に却ッて卑しからぬ自然の品位、いき〳〵と張る目元に得もいはれぬ愛嬌の額越、これで藝妓ならば絶えず年中の殺人罪なる

「お歸り遊ばせ」

廣行、無言に首肯いて、隻手に取りし帽子を渡しながら、ずッと其まゝ二階へ上れば、糸に引かるゝ如く續いて妻のキタ女、

上りて三疊、襖越に六疊あれど、八疊の座敷を晝は書齋に夜は臥房の境涯、寧ろ暢氣に打寛いで、床柱を背に當てし大胡坐、歸れば例となれる妻の手前に薄茶一椀、ぐッと一息の無雜作に飲み乾して、

「も少し早く歸らうと思ッたが、青山へ廻ッて遲くなッたよ」

「青山、あの西田樣で御坐いますの」

「さうだよ、しかし人間の氣といふものは妙なもンだね、まだ廢嫡以來、さう長くもならないが偖、かうなッた今の境遇から行ッて見ると、大きな冠木門に伯爵といふ西田の表札が白癡おどしの眼を剝いたやうで、何だか一種の滑稽じみて見えるぜ、はゝゝゝ兎も角も飯を食はしてくれ、腹が空いたよ、幸ひ夕食に近いから久しぶりで是非にと引き止めたがね、つまらない献立で嫌な奴に四角張ッた給仕しられるより、少々は不加減でも、やはり汝の手料理が美味いね乃公には、腹が空いた腹が空いた、ぺこ〳〵だ」

「ほゝゝゝ只今、すぐに差上げますが、外樣と違ひ、第一の御親戚でもあり、また月々の事お世話を下さる方ですもの、折角、さう仰しやるのを良人のやうに、御自身ばかりの御勝手で、さう無愛想になさるもンでは御坐いませンよ、御馳走になッて入らッしやれば宜しいに、無理に私の不加減を召上らずとも」

「や、とンだところで、やられた、決して不加減ぢやアない、有難く頂戴す

るから早く出してくれ、贅澤は無論いはな、が、けふは何だ」
「お晝飯に三品も差上げましたでせう」
「晝の事ぢやアないよ」
「ですから今夜は、一品で御辛抱あそばせ」
「する〳〵、一品で辛抱するから早く賴む、しかし一品は何だらうね」
「御覽になれば、わかりますよ」
「御覽にならない先、ちよいと聞きたいよ」
「ほゝゝゝまるで小兒のやうです事ね」
「英雄また時に兒戯を學ぶだ、人事一切の不自然を取ッて退けた汝の前では小兒だよ、この小兒よく保護をしてくれ、あまり遲いと泣き出すぞ」
「ほゝゝゝどンな泣き聲で御坐いませう」
「わあッ」

いかに戯けても、いかに馬鹿げても、世間普通の人間、こゝまで調子外れの無遠慮に馬鹿げ得らるゝものでなし、まして床柱に背を靠せ兩腕を組ンで眞面目な顏に俄の大口を開きながら、
かゝる馬鹿馬鹿しき事、門外一歩の他人に對うては醉うても狂うても出來ぬ筈、心の底まで打解けて我身に許し給へばこそと、その呵しさよりは嬉しさの彌增すキタ女、
我前に運ばれし膳の上を、廣行ちらと見て、はや箸を隻手に隻手の飯茶椀を差出しぬ、
「はゝア、お手料理の一品、これかい、煎鳥だな」
「ほゝゝゝたまには良人、さういふ一品の方が宜しう御坐いませう」
「宜しう御坐いますがね、こりやア煎鳥でなく煎午房と煎蒟蒻だぜ、どこへ遁げたか鳥の所在が頗る不明瞭だ、よほど追窮しないと捕まらない」

「お晝飯に良人、さンざ鳥を召上ッたでは御坐いませンか、その餘分ですもの」

「なるほど、よくいへば二度の勤めで、わるくいへば捨場に困ッた食ひ餘りの廢物利用だね、段々と汝も、世帶人になッて來たよ、この分ぢやァ、いくら乃公が貧乏しても大丈夫だ、はゝゝゝしかし煎午房、なか〳〵食へる、煎午房も、なかなか美味い」

元來の大食、まして空腹の夕飯、饒舌りながら普通の三人前以上、これだけでも舊式の大名華族を嗣ぐには不合格の男、そろ〳〵後で帶を弛め出す無作法に至ッては、いよ〳〵金屏風の殿樣に不似合なり、

食後の帶を弛めし時、その懷中より摑み出だせしは、紙にも包まぬ裸の百圓紙幣三十枚、妻の前に拋げ遣りながら、

「おい、それを仕舞ッて置いてくれ、三千圓あるよ」

「良人、此お金は」

「今日、青山の西田から借りて來たンだ」

「どうしてで御坐います」

「どうもしない、ちよいと入る事が出來たからさ、理由は後で話すが、今日その三千圓を借りるに就いて、よほど面白かッたよ、父の慈愛に賜はッた例の六萬圓を保管してるからね、いづれ何か面倒な事を言ひ込ンで來る乃公と思ッて居たンだらう、早呑み込みに、あの中の三千圓と心得て、すぐに承知したが、いや、あれは廢嫡の砌、親戚立會の上お預け申したもので目下の境遇に應じた月々の利子を頂載する外、一文たりとも手を著けませン、もし廣行が其中の幾何をと願へば當然お叱りを蒙るべき筈の金と心得ますから、別に三千圓お手許より借りたいと斫り込ンでやッた、はゝゝゝところで三千圓、何に入用だといふから、もし其費途を聞いた上で貸さう

といふ事なら、それを聞かずに斷然、おことはり下さいと一本、まゐッた時の面が呵しかッたね、貸す奴が借りる奴に逆捻を食ッて狼狽へた工合よほど變に妙だッたよ、はゝゝゝ加之も今年の十月に必ず返濟するといへば、まず〳〵煙に卷かれてね、それにも及ばないといふから、また一本、まゐッてやッた、わづか三千や五千の端金で返濟の期日を間違ッちやァ其方より此方が勘定に合はない、同じ間違ふくらゐなら、せめて五十萬か百萬圓、それも外に何か面白い立派な間違ひやうでもあればだが、單に金だけでは少々、惜しいやうな氣がして間違ひ兼ねますと、眞正面から吹き倒して來たが、あとで考へて見ると、あまり手嚴しく吹いて、聊か氣の毒だッたよ」

「まァ良人、何といふ事を、現在お金を借りるに、そンな勝手な理窟が、よく仰しやれましたねエ」

「なァに乃公だッて、先が先だから、あゝいふ調子に浴せかけたのさ、實際また頭を下けて賴ンぢや、駄效だ、ぐづ〳〵小面倒な文句ばかり多くて、迚も急に出來ない相手だよ、世の中に直接の利害を持たない華族といふものは自然の習慣上、なか〳〵氣が長くッて決斷力の乏しい要領の得ない上に動もすれば三太夫ども、入らざる餘計な忠義立をしてね、はゝゝは何、この三千圓を借りた理由か、つまり乃公が世の中へ出る時の手辨當だよ、六萬圓の五分利で月々二百五十圓づゝあれば、當分まづ此まゝの境遇に衣食住は差支ないとしても、たゞ生きて居るだけで生涯を送れる乃公ぢやアない、どうせ社會へ飛び出して何等か、生きてる以上の事を仕なければならない、ね、それに汝、多くもない一家の生活費を割いて持ち出せるかい、汝は乃公に月極めの二百五十圓で米鹽の顧慮さへなからしむれば宜いンだ、外へ出ての乃公は乃公で、その三千圓を手辨當に一番、やれるだけ

の事を遣ッて見よう、つまり汝は城を守る役で乃公は戰場へ打ッて出る武者だ」

「ほゝゝゝよく、わかりまして御坐います」

「しかし勝敗は時の運で進退は戰ひの常だから、をり〳〵城中へ逃げ込むかも知れないよ、案外また敵の勢ひ激しく攻め來ッて防ぐに遑なく、萬一こも落城するやうな事がありやァ、その時こそ婦夫もろとも城を枕に討死だ、はゝゝゝ志望ならずと雖も、汝と刺違へて死ねば乃公も本望だ、それとも汝、そッと搦め手から脱け出して互に手と手を取り合ッた落人の方が宜いかね、はゝゝゝどうだい」

「たとひ、たとひ、どンな事が御坐いましても、此お城だけはキタが必ず、守ッて居りますから御安心あそばせ、よし月々あの西田樣から運ンで下さる兵糧の途が絶えた時は絶えた時で、このキタは良人に、むざ〳〵お討死

させませン、その代り一事、お願ひが御坐いますよ」

「急に改まッたね、何の願ひだ」

「きッと良人、おきき下さいますか」

「きくとも、今の一言に對して何でも、きかざるを得ない乃公だ、全體、どういふこッたい」

「外でも御坐いませンがね、良人あの癖だけは、是非」

「あの癖、どの癖だ、あまり癖が多過ぎて分らないよ」

「ほゝゝゝ例の、いたづら、惡戯にも事を變へて良人、罪で御坐いますよ、新聞の廣告で人を欺して、わざ〳〵淀橋の空地へ連れ出したり、かはいさうに女學生の祕密を素ッ破ぬいたり、高利貸を黑枠へ入れたり、年の暮に呼び寄せて沸湯を呑ましたり、その他いろ〳〵、ほゝゝゝまア何が面白いのでせう、御自分だッて第一お手數のかゝる事ぢやァ御坐いませンか、あ

れが良人の惡い、御病氣ですよ」

「や、あれかい、はッはッはッ、わるい病氣は酷いね、何も病氣や蟲の故で仕たンぢやアないよ、ありやア汝、頭腦にも身體にも閑暇があり過ぎて困ッて居た時だからね、ちよいと退窟まぎれよ、ふざけて見たのさ、しかし罪ぢやアないぜ、つまり今日の間違ッた奴等へ頂門の一針だ、下手な修身講釋をする道學先生の三年や五年よりも、たしかに效能のある筈だ、はゝは丶色と慾の深い奴等が寒中、ぞろ〳〵用もない柏木の淀橋くンだりへ我劣らじと押掛けて、草の生えた空地で、あッと呆れた工合、面白かッたなア、わけて痛快なは鬼幸だッたよ、思ひもよらぬ死亡廣告を出されて青くなッてる奴を、また年内餘日もない大晦日前に屋敷へ引き寄せて、さンざ嘲弄した結句の果に背負投げを食はしてやッた時の面ア、なかッたぜ、まだ眼に見るやうだ、ことしの花見に乞食を自働車へ乘せてやッたも、面白

かッたね、はッはッはッ」

「それが良人、いけませンよ、あゝいふ事を、さう面白をかしく思ッて居らッしやる間は、また面白いだけで濟む事ばかりは、御坐いませンからねエ、今までの御身分と違ッて、少しは眞面目に萬事、御用心あそばさないと」

「わかッた、わかッてるよ、これからは一切あゝいふ惡戯を止さう、實際これからア頭腦にも身體も、暇がないから退窟まぎれに、ふざけても居れないよ、大に眞面目だ、しかし近來は、ちよい〳〵、よく汝に叱られるね」

「ほゝゝゝ良人が皆、お惡いからで御坐いますよ」

「なアに乃公の善い惡いよりも汝の馬力が強くなッて來たンだ」

「あら、馬力、ほゝゝゝまア酷い事を」

「だッて、さうだよ、今まで乃公の方から通ッて來た時分は何でも汝、おとなしく悄らしく只、はい〳〵と言ッて萬事、かうじやアなかッたぜ、つま

り女といふものは男の内兜を見透して、いよ〳〵安心すると氣が丈夫になッて段々強くなるンだな、居直ッて太くなる工合、まるで強盗のやうなもンだ、はゝゝゝ」

「竊盗でも強盗でも、何とでも、すきな事を仰しやッて、キタは平氣で居りますが、例の惡戯は良人、他人ばかりの世間で御坐いますよ」

「うン、よし」

「全くで御坐いますよ」

「あゝ承知してる」

用が濟めば、かまはずに早く寢よといふ言葉を、無上の有難味に感じて、階下の飯炊婆も小間使も枕に就けど、まだ階上には雨戸一二枚を閉め殘して、寒からぬ肌心地、臥房へも入らず身を横へながら外を眺むれば、墨繪の如き上野の森に、ぼッと霞める春の朧月、

「絶えず見馴れて居ても、かうしたところは、わるくないねェ、四邊は閑靜だし、外に人はなし、まるで浮世を離れた山家のやうだ、殆ど市中の景色とは思はれないせ、加之も時候が宜いね、花は散ッて春の末、夏まだ來ない肌心地に、この朧月夜だ」

「しくものはなしといふので、御坐いますねェ」

「さうさ、水で洗ッた空に磨いたやうな秋の月よりも、あの、ぼうッとしたところに得もいはれない風情があるよ、何だか妙に人の氣を唆るやうでね、衣香扇影の春も夢と過ぎ去りし多情多恨の才子佳人がまゝならぬ、戀を語ッて情緒纏綿に泣くのは、かういふ時だせ、しかし乃公と汝は笑ッて樂しむやうになッたなあア、はゝゝゝ」

折しも池の端の待合を流し歩いて、この初音町まで來かゝりし新内の連れ彈き、春の夜深に三味の音ます〳〵冴えて、おもはず耳を澄ませし廣行、今更に畫ける如きキタ女の顔を打守りながら、我しらず聲を沈めて、

「おい、雨戸を閉めて仕舞へ、あゝいふものを聞いて、をかしく變な氣から互の身を過つやうな人間にならなかッたのが、實に僥倖だッたよ」

其二

子爵中の第一、華族中の富豪、その長男に生れて帝大出身の法學士、年は正に三十一、いはゆる鬼に鐵棒の身を我から去ッて廢嫡を甘ンじ、さらに赤裸々たる一個の平民として初音町の借屋住居これを面白しと見るも見ざるも、以上の事實は既に世間普通の尺度と秤量を以て極めらるゝ男でなし、

さらに絶世の美人、その影にありといへる一事は、一面に於て松川廣行の人格を疑ひ耽溺を惜しむものあれど、また一面に於ては松川廣行の洒落を稱し艶福を羨むものあり、

わけて人間の萬事一切を戀のためとして、愛は生命の露なりといふ先生達より見れば、富貴を捨てゝ戀愛の二字に生きたる松川廣行、殆ど詩的の感涙を以て迎へられぬ、

いかに夜は遲くとも朝は必ず六時前、全身の冷水磨擦に朱を注ぐが如くなりし後、露まだ乾ぬ上野の森に對うて二階の障子を開け放ち、さも心地よげにエムシーの煙を白く吐きながら、都下十三種の新聞中いづれも四五枚に眼を通せし頃、キタ女が運ぶは四合の沸騰牛乳に半熟の鷄卵三個とバタ燒のパン一斤、

「今朝ア久しぶりで味噌汁を吸ッて見よう、ついでに飯も付けて來てくれ」
「では、さう致しませう」
「おい〳〵、それを下げるンぢやアないよ、やはり汝、それは、それで、別に味噌汁と飯だ」
「あら、まア良人、この外に召し上りますの、ほゝゝこれだけでも世間普通の、たしかに二三人前は御坐いますよ」
「他の何人前でも宜い、乃公の胃袋には一人前だ、大い汽鑵は普通よりも石炭の入るもンだよ」
「あまり石炭が多過ぎて、汽鑵の損じるやうな事は、御坐いますまいか」
「大丈夫、安心しろ、保險付の別製だ」
階下より取次の小婢、一葉の名刺を持ち來りて、是非お目にかゝりたいとの口上、キタ女これを廣行に渡せば、おもはず眉を顰めながら、

「草野蟲聲、はゝア蟲聲、こりやア文學雑誌や新聞で、をりをり見る小説家だ、小説家が乃公に逢ひたい、はてね」
「御存じで、御坐いませンの」
「知らない、第一この乃公は、あまり小説なンか讀まないからね、しかし文士といふもの全體、どンなもンか幸ひ一度、かういふ用のない閑暇な時に逢ッて置かう、また何かの參考になるだらう、汝こゝに居ない方が宜いね、年中モデルはかり探してる小説家や美術家は汝に取ッて頗る危險物だよ、はゝゝゝ」
ちらと睨みし額越の目元、水晶の如し、
「また御宪談を、ほゝゝゝ」
笑ひながら靜に振返りて、
「そさうのないやう御丁寧に、お通し申して、お番茶を差上げなさい」

其まゝ鄰室の六疊へ襖越の雲隱れ、
小婢の案内に入り來りし草野蟲聲、ひよろ〳〵と高く痩せこけて前に倒るゝが如く背髓の曲りし體格、日陽の活動よりも日陰の沈思默考に耽れるためか、蒼白き顏色いよ〳〵血の氣を失ひ、元來の神經過敏に營養と運動の不足ます〳〵病人めいて、年輩三十前後、電車でも往來でも手に放さぬ泰西の詩集一部を携へながら、先生これなくては方角も分らぬ鼻頭の眼鏡越、
わざ〳〵醫者の診察に及ばず、一見その容貌に人生の悲慘を宿して、何とやら哀れを催せし廣行、
「さア此方へ、松川廣行です」
酒れても大川の末に水は絶えず、借屋住居なれど下宿屋より一轉せし新世帶でなく、自然に整ひし座敷の調子、淺黄無地の縮緬座蒲團、古き桐胴に光琳蒔繪の火鉢、マニラの葉卷とエジプトの金口を供せられて、聊か場馴れぬ點あれど

わざと殊更に落付いたる顏色、
「始めて、お目にかゝります、草野蟲聲で」
「や、お名前は久しく聞いて居ります、此方は承知して居ッても、先生方に知られる筈のない松川ですが、第一よく此家がわかりましたね、全體、どういふ御用です」
「別に改まッて、どういふ用と、いふ用も御坐いませんが、或新聞記者から貴君の事を承りまして一應は是非、お目にかゝッて置きたいと、つまり我々が說の上に於て筆の上に於て、絶えず常に理想とするところを現在、貴君に依ッて遺憾なく實行されたのですから」
「はゝア、或新聞記者から、加之も先生方の理想を、この松川が、實行したといふ事に、なるンですか」
「さうです、殆ど社會の全部を擧げて、只これ物質的の今日、わけて最も羨

望の的となるべき富貴を捨てゝ、更に意義あり生命ある戀のため愛のため、その神聖を何物にも汚されず完全に現實されたといふ一事は、いかに我々の理想を世間に强められたか、いかに我々の權威を世間に發揮されたか、我々としては出來得るかぎりの滿足を表して、感謝せざるを得ません」

案外の人間に案外の滿足を表せられ、おもはぬ不意に思はぬ感謝を捧げられてだしぬけの有難迷惑、流石の廣行も殆ど返答に困りし體、たゞ笑うて挨拶するより外なし、

「はゝゝゝどういふ事で來られたかと思ッたに、はゝゝゝさういふこッてすか、つまり僕の調子外れに生家を飛び出して今日からなッた馬鹿さ加減が先生方の、お氣に入ッた理由ですな、はゝゝゝいはゞ過失の功名ですな、はッはッはッ」

入らざる無用の見當違ひに例の大口を開いて笑へど、その笑ひ聲を寧ろ謙遜的

と見る二度目の見當違ひに、ますゝ膝を乘り出せし蟲聲、

「いや、全くです、社會あらゆる總ての方面に人間あらゆる僞善と虛榮とを以て裝飾せる今日、本能の自然に從うて眞美の結晶たる戀と愛とに生きられたのですから、貴君としては人生これ以上の幸福なく、また我々より見れば常に高く淸く大なるところから暗示されつゝある理想を現在に實現されたものです」

「はゝゝゝさう淸く高い先生方の理想攻めに尊敬されては困りますよ、なアに實はね、本能の自然でも眞美の結晶でもありませン、たゞ祖先傳來の系圖一卷に縛られて家風とか格式とかいふ兒戲に類した面倒臭い華族が嫌で鳥の籠を放れた如く飛び出して來た此處に、さうですね、まづ妻とすれば、しても差支のない女が一人、あッたからで、その他に何があるもンですか、

「はゝゝゝ人間の本能も幸福も努力奮鬪して得らるれば實際これからですよ

「今のところは只この通りぼンやりと、生きてるのみで、わざ〳〵戀にも愛にも生きては居ませンよ、當分は絲に繫がれた風船玉の如く、むやみな方角へ飛ばないだけの事で、いはゆる今日の言葉でいへば、何等の充實もない空虛な無意味の生活狀態です、やかましい伯父でもあれば吐鳴り付けられる境涯でせうよ、はゝゝゝ」

快活恬淡の廣行、もはや蒼蠅くなりて殆ど半笑ひに扱へど、先生さらに依然として少しの感じもない顏色、

「いはゆる俗世間の充實したといふ生活狀態は、寧ろ我々の眼より却ッて空虛な無意味で、あはれむべき點に滿ちて居ります、ついては甚だ突然で御坐いますが、なほ委しく承ッて、ありのまゝに少しも僞らない神聖の戀愛、それ直に貴君を小說の主人公として、いかゞでせう、辛ひ目下、他に筆も執ッて居りませンから、願はくば奥さンにも一度、この際お眼にかゝッて置けば猶更ら萬事に都合が宜いかと思ひます、つまり架空の想像でなく、現在こゝに貴君といふ實際の主人公があッて、これほど立派に遺憾なく戀愛の神聖を遂げられた事實を此まゝ埋めて置くといふは、いかにも我我として忍びない事ですから」

さらに憎むべき點もなく罪もなけれど、世間しらずの無遠慮と自個本位の無作法とに、廣行いよ〳〵堪らず眉を寄せ鼻を皺めて、今は眞正面より顏を見るさへ不愉快の體、横を向いて一息に濃厚なる莨の煙を吐きながら、

「折角ですが眞ッ平、御免を蒙らう、まだ滿足に一家の主人公にもなれない松川廣行がいやしくも、今日、文壇の大家たる先生の筆を煩はして小說の主人公には迚も、なれませンよ、もし前途將來、幾年の後に於て多少、みづから心に誇るべき自信の時でも來れば、その節あらためて願ひたい、また愚妻は頗る時代の潮流に後れた舊思想な奴で、自分の知ッたところへも

出かけない簑蟲流だから、わざわざ用もない始めての人に逢ひませンよ、まして刹那の瞥見にも何等かの意味を以て深く印象を殘さるゝ先生のやうな人には、一種の恐怖心に襲はれて顏色を變へるほどの臆病もンですからね」

「なるほど、いや當世風に華かな交際場裡の喋々たる婦人よりも寧ろ却ッて實際は、さういふ温雅なる御婦人に底力の強い戀愛の眞味を保たれて居るンですな、お目にかゝれないだけ、ます〳〵我々の尊敬に値ひ仕ます」

「時に先生、實は今日、ちよいと約束の時間があッて他出しますから其うち、また、おいで下さい、これで今日は失敬しませう」

「は、では近日また伺ひますが、その節、小説の事は暫く置いて、一篇の詩を御覽に入れませう、つまり貴君を詩にしたもので、愛の神の暖き袖に包まれたといふ意味を」

松川廣行、今日は暗劍殺に向へり、小説を御免蒙れば詩にすると迫られ、もし詩を斷れば何にするといふやら知れぬ相手、どこまでも免れぬ災難と諦めて、

「有難さ、どうか願ひませう」

其まゝ坐を起ッて二階の降り口より下を向いての大聲、

「おい、お歸りだよ」

やう〳〵これで退散せり、

草野蟲聲の去るや否、そッと隔ての襖を開けてキタ女の顏、例の太く濃き眉を八字に寄せし雪の額際、いよ〳〵冴えて曉の白き花を見るが如し、

「まア良人、とンでもない、お客樣でした事ね」

廣行、ごろりと身を横に兩脚を伸ばしながら、振返りて右手の頰杖、

「や、實に困ッたよ、木戸幸四郎、所謂るひとごろしと稱せらるゝ都下第一の要辣な高利貸、あの鬼幸でさへ手鞠に取ッて面白かッた乃公も、今日と

いゝ今日は實に閉口したね、殆ど一種の責苦だッたぜ、まさか小説家全體が、あゝでもなからうが、文士なンかといふもの、その筆に現はれたところとは違ッて、あまり社會の實際に沒交渉すぎるね、あまり眼前が見えなさ過ぎるよ、責任ある多數の決議でさへ間違ッた事の多い世の中に、何事も獨り誇稱の自分から割り出して他に對する相互關係といふ事を少しも知らないから、あゝなるンだぜ、寧ろ哀れに氣の毒な感じが起ッた、第一あの不健全に發育を妨げられて不調和に出來上ッた容貌體格どうだい、あれで最も健全の腦力を要すべき思想界の優勝者たらンとするンだもの、勢ひ半病人にならざるを得ないよ、鰹節と一般、まるで自分の身體を削ッて行くンだからね、同じ鰹節も場違ひだ、ありやア本節でない、かめ節だぜ、

「まア良人、酷い事を、おかはいさうに、あの方だッて何も御自分の身體が惡くなるのを、わざ〳〵、すき好ンでは入らッしやいませンよ」

「入らッしやらなくッても現在の事實が、さうなるだらう、人生の行路上、よくない考へだ、道のために倒るゝといふのは、も少し大きい立派な道のこッたよ、初めて逢ッた乃公を捉へて、すぐに小説を書かうの詩にするのといふやうな、狼狽へた慌てた小さい薄ッぺらな道のために大切の生命を懸けちやア、つまるまい、はゝゝゝしかし罪はないね、あれで自分の事ぢやアない、他の事にも戀だの愛だのと眼色を變へて騷ぐンだからね、おい、是非、汝を見たいと言ッたぜ、見せてやれば宜かッたよ」

「今になッて良人、そンな事を、小説家や美術家は年中モデルばかり探し歩いてるから面倒だ、隱れろと仰しやッてさ、お鄰席で聞いて居れば、キタの事を良人、何と、お言ひで御坐いました、華族が嫌で飛び出して來た此家に、まづ妻とすれば、さうですねエ、しても差支のない女が一人、あッたからだと、もし差支のない女が二人も三人もあれば良人、どうなさいま

す、どんな女を、一時の間に合はせに、お取りで御坐います」
「はゝゝゝさういふ工合に聞えたかい」
「さういふ工合に聞えたのでは御坐いません、現在、さう慥に仰しやッたンです」
「そりやア惡かッた、つい口が辷ッてね、はゝゝゝ」
「お心にない事が、お口へ出る筈は御坐いません、なるほどキタは仕方なしに已むを得ず、兎も角まア當分、かうして置いて戴く身分で御坐いますから、別に恨みがましい御不足を申し上げませんが、わざ〳〵始めて來た方にまで」
「や、とンだ事で窘められる、あの平凡小説家め、さンざ眼前で乃公を惱ました上、歸ッた後にまで災難を殘しやアがる、ちよいと來てさへ、これだ、あゝいふ奴の書いた小説は、定めて世間一般を惱ますこッたらう、いふ事

に罪がないと思ッたが、やはり罪の深い奴だな、今度もし來たら、今日のやうに哀れ氣を催さず、容赦なしに、頭上から吐鳴り付けてやらう」
「ほゝゝゝそンな良人、勝手な事が御坐いますか、御自分の惡い事を、棚へ上げて」
「棚の上でも床の下でも宜いぢやアないか、惡いといはれて謝るのは世間の他人に向ッた時だ、それとも汝、この乃公に謝らしたいのか」
「ほゝゝゝ御免あそばせ、キタは良人、さういふ覺悟で申したのでは御坐いませンから」
「ぢやア、どういふ覺悟で、言ッた」
「ですから、御免あそばせと、申し上げてるでは御坐いませンか」
「はゝゝゝ弱いねエ、これが汝、主客顚倒の論鋒といふンだぜ、はゝゝゝ時に今日の晝飯は何だ、何を食はしてくれる」

「まだ良人、朝、めし上ッたばかりで御坐いますよ、その時が來ませンと、わかりかねます」

勝ちたくはなけれど、負けて口惜しく、口惜しけれど腹も立たず、腹は立たねど笑ひたくないキタ女の風情、すッと其まゝ靜に二階を降り行く後姿は、殆ど技藝の神に入ると稱せらるゝ名優の遺憾なき表情よりも、わざとならぬ自然美の極に達して、惱殺の文字以外さらに形容詞なし、

されど馴れし廣行の眼には、この名花一輪これを常として見送りもせず、殘れる今日の新聞を手に取上げながら、この木像が今あの馬鹿口をきゝしかと、ふしぎに思はるゝ沈思默讀、

花柳の巷に溺れて我ものならぬ美人の一顰一笑に、惜氣もなく家庫を失ひ身を亡ぼし罪を犯すものより見れば、この松川廣行、いかにも冥加の盡きた勿體ない奴なり、

其　三　二

きのふは思ひもよらぬ小說家に襲ひ込まれて、ちよいと憎からぬ夫婦喧嘩の眞似事をせしが、現在こゝに暫く世を忍ぶが如き此ごろの境涯、

あらたまりて誰訪ひ來る人もない身、午前中に都下あらゆる新聞雜誌、午後は內外新刊の書籍に耽りて、飽けば其まゝ飄然と例のステッキを引き摺りながら、近き谷中の邊より上野の散步、をり〳〵田端王子を以て遠出とせる廣行、また今日も何處へ出でしやら、

春の末、夏の初、日影うらゝかに卯月の空は霞みて、樹々の若葉まじりに散り殘る花の色、白く赤く、ちらほらと人を誘ふ門外の好時節、

良人の出でし後は、なほさら隅々まで心の行き渡りて、歸り來ませる時に塵一

筋も見せじと、けさ掃きし八疊を今また掃き出だして、箒を隻手に何心なく一階の縁端より見れば、袴の裾長く黑の山高帽を深く一重外套に身を包みて靜に歩み來る老體、正しく父の松川廣道、

良人の父とはいへど、その良人こゝに家を去れば、世間普通の言葉に晴れて舅ともいはれぬ身、いとゞ猶更ら嬉しく有難く、用なき平生は睡れる如きに靜なる性質なれど、慌てゝ手に持てる箒を鄰席の六疊へ抛げ込むや否、召使ひに出迎はせては濟まぬ心の我を忘れて駈け降りし途端、梯子段の二つ目より辷り落ちて、玉を欺く眞白の踵に赤く梨地のやうなる過擦傷をうけながら、痛いとも得いはず顏も皺めず、其まゝ入口の障子を引き開け、つゝまやかに、坐して待ち受けし哀れさ、

こつ〳〵今ごろ何處をステッキの先に叩いて歩くやら、良人たる廣行に一目、見せてやりたし、

父の廣道、門の敷石に歩を停めて、まだ依然たる山村キタトいふ表札を仰ぎ見ながら、ずッと入れば、慇懃に迎へし我子の妻、

「おゝ汝、どッかで乃公の來るのが見えたかね」

「はい」

「廣行は居るかな」

「兎も角も、お二階へ」

跪いて帽子を受け取り、そッと背後より外套を脱がせ、あとに隨いて二階へ上り、床の前に座蒲團を進め、引退りて身を縮めながら、

「御機嫌、よろしう御坐います、折角、お越し遊ばしましたに、また今日も、生憎」

「はゝア、また居らンか、よく出る奴だな、これで二度も來て逢はない」

「どうか暫時、つい其邊までと心得ます」

「いや〳〵廣行に逢はンでも、汝が居れば宜い」
「恐れ入りまする」
「やはり電話がないと困るな、屋敷の者が何と言ッても、をり〳〵乃公は來たいからね」
はやキタ女の眼に涙、
「定めし、あゝいふ我まゝな奴だから、いろ〳〵世話が多からうな、まア辛抱してやッてくれ、あれは幼少い時から萬事に無遠慮な、氣の勝ッたもンだからね」
たゞ無言のまゝ兩手をついて頭を下げしキタ女、艶々しき黑髪の打顫へるは、保ちかねし涙、眼睫に宿らず膝に落ちて、泣けり、泣けり。
泣いて聲は聊か曇れど、靜に晴れし目元の額越。
「お茶は、いづれに致しまして」

ます〳〵いぢらしく哀れに見る父の廣道、
「さうだな、過日、來た時、なか〳〵腹加減であッたが、今日は煎茶を欲しい」
「はい、しかし只今お茶が、あまり、よろしく御坐いませンで」
「いや、入れてくれゝば宜い、たゞ咽喉が乾いてね」
抹茶は固より煎茶の心得、茶道一切はキタ女が得たる藝中の至藝、おもはず廣道をして舌鼓を打たしむ、
「すべて茶の方は、よほど手に這入ッて居るね」
「お恥かしう御坐います」
「時に相變らず廣行は浴室で、獨相撲を取ッてるかね、はゝゝゝ」
キタ女も始めて笑ひぬ、
「ほゝゝゝ當分の間は、御本でも讀む外に、これといふ御用が御坐いませン

から」

「しかし廣行の性質として此まゝ長く、本ばかり讀ンで居りもすまい、何か汝に、さういふ意味で話した事はないかね」

「はい、あらためて別に、お話しも承りませンが、いづれ何か、さういふ思召のある事とキタは、心得て居ります、十三種も毎日まゐりまする新聞で御覽になッた後、をり〳〵切り拔いたところが御坐いますから、伺ッて見ますと、たゞ笑ッたまゝで、しかし、お手文庫に、その切りぬきが澤山」

「そこだ、萬事あゝいふ無頓著で、ばッとして居ても、さういふ點のあるのが廣行だよ、はゝゝゝ世間で何といふか知らないが乃公はね、廣行の出たのを却ッて、おもしろく見て居る、何をするか實は心に、樂しンで見て居るよ、第一また汝といふ優しいものが、付いて居てくれるでな、安心して居る、どうかね、よろしく廣行を賴むぜ」

「はゝはい、迚も、不束なキタ、迚も及びませンが」

「いや、汝に賴ンで置けば安心する、ところで今日は何か汝にみやげを持ッて來ようと思ッたがね、萬事、人まかせの體でね、思ふやうにならない」

懷中より取出だせし袱紗包、ざくりと置いて、

「これはね、いろ〳〵の小道具を外して乃公が持ッて居た中から、選つて來たよ、はゝゝゝ」

キタ女、坐を辷り寄りて、押戴けば、案外の重さ、されど今この場に開けて見られもせず、

「何か、存じませンが、ありがたく頂戴いたします」

「其うち、また來ようね、あまり長く居れない、何、一人で歸る、それに及ばン、却ッて一人が宜い、電車の地圖で、よく見て置いたからね、今日も汝、間違はずに乘替を貰ッて、駒込の白山前で降りて、この邊まで、辻俥

に乘ッて來たよ、はゝゝゝ便利だね」

帽子、外套、下女にも手を付けさせず、履物を揃へて門口へ送り出し、その姿の辻を曲りて消えし後、また辻まで走せ行きて見送れば、見返りて手を觸られ、はッと傍の軒下に身を潛めながらの中腰、

やう〳〵客待の俥に乘られしを見屆けて後、家に歸りて袱紗包を解けば、綿の如くなりし大奉書四五枚の中より、眼を射るばかりの金色燦爛、刀の目貫、柄頭、切齒、鋏の數々いづれも名作、このまゝ鑄潰しても四百目以上の黄金、印籠の緒締を外されしか、みごとに大粒の珊瑚珠十一個、

キタ女、見るや否、兩眼の涙、ぼろ〳〵と眞白き頰を傳うて、其まゝ泣き伏しぬ、

何をがな此身に賜はらむとて、眼に立たぬやう人に知れぬやう、この品々いかに御心を苦しめられしか、我物を盜むが如くに内々そッと嘸や嘸、いかに四邊

を憚りて御苦勞あそばせしやら、もし差迫りし事でもあれば、これを賣拂へとの思召か、たとひ其日に飢うるとも、キタが手足の動く間、これが何として世間の通用に代へらるべき、もし帶留か簪その他にせよとの思召か、たとひ身の冥加にせよ、キタが心の狂はぬ間、これが何として入らざる浮世の飾りに用ゐらるべき、

春夏の交、永き日も傾いて、夕暮近くに、ぶらりと歸り來りし、廣行、

「や、今日は實に草臥れたよ、山つゞきに田端から王子まで出かけてね、砂塵で眞ッ白だ」

ばた〳〵と梯子段の下にて袖を叩き裾を拂へば、キタ女おもはず身を反して顏を横に、

「あらまア良人」
その聲を後に聞き流して、はや二階へ上るや否、我身を拋げ出すが如き大の字、
これも華族では出來ぬ氣樂さ、
「良人、何故お早く歸ッて下さいませンの、また今日お父樣が、入らッしゃいましたよ」
起き直りし廣行、
「しまッた、また入らッしたか、殘念だッたよ、これで二度お目にかゝれなかッたな」
「勿體なう御坐いますよ、こゝへ來ようと思召せばこそ、誰に御遠慮のない中を良人、いろ〳〵お氣兼あそばして、馴れない電車や辻俥で入らッしやるンですもの、御存じなくても、やはり御不孝に當りますよ」
「どうも乃公より汝の方が、お氣に入ッたばかりでなく、緣が深いやうだね」

「それに良人、有難い事に此キタを何と思召してか、こンな、おみやげを」
袱紗包を解いて眼前に開かれし廣行、我は家を捨てゝも父は我を捨て給はぬ心の品々、差俯いてまた今更の嬉し涙に泣く妻よりも、身に徹へて辛し、
「さうか、これを汝に下すッたか、代價にして幾何になるか兎も角、こりやアね、家に傳はッた名作物ばかりだよ」
「かやうなものを戴いて、もし、お父樣の御迷惑になるやうな事は御坐いますまいか」
「なアに、さういふ心配は入らない、父の手許で、まだ外に澤山ある中だから、しかし思召は厚いぜ、よほど汝が可愛いと見える」
「いゝえ、これも皆、良人のためで御坐いますよ、なるほど廣行が家を出たのはかういふ、立派な理由であッたかと一日も早く良人、おなり遊ばさないと、すみませンねエ」

「全くだ、うか〳〵して居れない」
「世間普通の親御とは違うて、一切お暮らし向の事に良人の御心配ない、お父様ですもの、他より猶更ら御孝行も、お樂に出來る筈で御坐いませう、」
「いち〳〵さういはれると困るが、こゝ暫時だ、まア默ッて見てをれ、田端から王子まで歩いて草臥れるが天下横行の道に凹垂れる乃公でない、まさか慈愛の深い父に不肖の子を持ッた歎は發せしめないよ、華族を脱し子爵を捨てるにはそれだけの、必要と覺悟とあッてのこッた、あの西田から取ッて來た三千圓、あれに手を付け出す時は、そろ〳〵乃公の社會へ出る時だ、しかし三千圓の事に付いて今日、父は何もいはれなかッたらうな、さらに御存じのない樣子だッたらうな、いくら西田でも固く念を押して來たから、僅あれくらいの金で父の耳には入れまい、なアに餘計な御心配かけては、猶更ら申譯ないからよ」

其四

きのふ半日の野外に草臥れしか、いかに夜は遲くとも朝は必ず六時前の廣行、今朝にかぎりて九時を過せど臥房を出でず、はや十時に近きころ、なほ其まゝ夜著の襟に顏を埋めて、
もしやと思うて靜に膝行り寄りしキタ女、夜著の上に輕く片手を置きながら、
「良人、良人、どう遊ばしたの、もう十時で御坐いますよ、ねエ良人」
夢にも入らざりしか、夜著の中より寢言でもない聲、
「むゝさうか、むゝ」
「どッかお氣分でも、お惡いのでは御坐いませンか」
夜著の襟を持ち上げて、これ見よとばかりに、ぬッと顏を差出せし額越、

「なァに今朝ア平常よりも早く、天明前に眼は覺めたがね、ちよいと考へる事があッて、やう〳〵今その考へが付いたところだ、途中で起きちやア折角の考へに龜裂が入るからさ」

「ほゝゝゝ夢と引續ぎで寢ながら今まで考へて居らしッたの」

「夢と引續ぎ、こりやア汝に似合はない洒落だ、はゝゝどりや起きよう、もう十時かい」

枕頭に聲を潜めしキタ女」

「階下に、お客樣が」

「客、誰だ、謝れば宜いに」

「それがね良人、斷りきれない人で御坐いますよ、あの新聞屋さン、例の淀橋一件から、ちよい〳〵來かけた新聞屋さンですからね、一應は斷ッて見ましたが、是非お待ちすると言ッて、階下の六疊に先刻から」

「うるさいね、しかし始めての奴でなし、待たした以上、仕方がない、一昨日は小説家で今日は新聞記者か、はゝゝゝだが穴居的の小説家と違ッて多少、世の中の空氣に觸れてるから話しの分る點もあるよ」

襯衣のまゝ例の冷水摩擦に降り行きし後、手早く夜具を疊み座敷を掃き出して、待たせし新聞記者を迎へ、慇懃に茶菓を進めながら、

「大變に、お待たせ申し上げまして」

これまで二三度も見ながら、今日また見直せば、今日また新に冴えて、ますます水際の立ちし美人、見るほど眼に驕るゝ容色とは違ひ、見る毎に何とやら我身を照り返さるゝ心地、場うてのせざるを以て第一の條件とする新聞記者も、聊か固くなりし體、

「朝から、お邪魔いたしまして、何とも恐れ入ります」

「いえ平生は、かやうに遲くも御坐いませんが、つい今朝に限ッて、失禮を

いたします、どうか貴君、お樂に、お膝を、おくづし遊ばして」
「は、ありがたう、いや、これで結構です、しかし此邊は閑靜で宜しう御坐いますな、塵埃だらけの中を飛び廻ッてる眼から見ますと、實に、まるで、別世界の氣が致しますよ」
「嘸、お忙しう入らッしやいませう」
「時に昨年の暮は、とンだ御迷惑で御坐いましたな、あれ以來まだ殘念ながら例の、いたづらもの、わかりませンよ、隨分手を盡して見ましたが、よほど巧に晦まして居りますね、第一あの後に業を仕ないからでも御坐いますが」
「あの節は、いろ〳〵御深切さまに」
「いや、あれが御緣になッて、御主人に手前こそ、御厄介になッた事が御坐います、舊臘、途中で、お歳暮を戴きまして」

「まア失禮な、途中で、いえ萬事あゝいふ露骨の人で御坐いますから、この後とも一切お氣に、お觸へ下さいませンやう、よろしく、お願ひ申し上げます、ほゝゝゝ少しも存じませンで」
「どうして、あれだけの名門で、よくまア、あれだけ磊落恬淡な、平民的になられますよ」
「ほゝゝ自分でも常に、さう申して居ります、乃公は百姓か土方に生れる筈を、あンな家へ間違ッて出たンだと、ほゝゝゝ總てが其調子で御坐いますから、つい人樣にも失禮ばかり」
折しも全身の冷水摩擦を終りて、顏も手も赤く醉へるが如くに入り來りし廣行、座に著いて輕き會釋、
「やア暫く〻逢ひませンな」
「その後は、御無沙汰を致しました、實は社用で、京阪地方へ旅行中で御坐

いましたから」
「さうですか、京阪の春は格別、また宜いでせうな、おいキタ、今朝ア壹飯と同時にするよ、馬鹿に寢坊をした、時に汝、この先生と何か頻に談話をして居たらしいが、氣を付けないと、いかンぞ、すぐに新聞種だ、或意味に於ける一種の斥候で、かういふ先生には觸らぬ神に祟なしだよ、はゝゝは」
「こりやア酷い、新聞記者を厄病神と同じ取扱ひは少々、酷う御坐いますな、はゝゝゝ」
キタ女も笑ひながら坐を避けし後、廣行、胡坐のまゝの席を進めて滿面の微笑、
「どうですな、近ごろ面白い事がありますか、この松川も君、首尾よく放免されて、いよ〳〵殿樣を遁げて出たから實に暢氣だ、心靜に體豐に骨また伸びたりといふのは、これだらう、たしかに五年や十年は長生するに相違

ないね、はゝゝゝ」
「しかし世間の俗物から見れば、不思議に思ッて居りますよ、富貴これ權勢の今日」
流石は人に馴れたる新聞記者、俄に四邊を見廻し首を縮め聲を潛めて、
「その不思議には幾分か、奥さンの美も含ンで居りませう、もし他人なら幾分でなく、全部あの美が正體ですな、へゝゝゝ」
廣行、反身の高笑ひ、
「はッはッはッ、もし現在の事實が雄辯とすれば、まづ今のところ、奈何せン、さういはれても仕方がない、しかし不思議の正體は、別にありだ、今に物凄く現はして見せるからね、はゝゝゝ時に君、草野蟲聲といふ小說家、ありやア君が話したンぢやアないかね、ある新聞記者に聞いたと、言ッて來たぜ」

「はゝア蟲聲、伺ひましたか」
「伺はれたよ、大に伺はれて大に惱まされた、いくら暇でも、あゝいふもンを君、よこしてくれては困るね、も少し人間らしい奴を紹介するが宜い、ありやア、人間放れを仕すぎてるよ」
「いや、實は、貴君へ、あれを紹介いたしたのでは御坐いませン、ちよいと只、お噂をしたばかりで」
「お噂でも何でも、うるさいよ、蒼白い痩ッこけた半病人の面で、熱に浮かされた囈言のやうな戀だの愛だのと、まるで色餓鬼の亡者だ、ありやア讀ンで字の如く蟲聲、蟲の聲でなく、蟲の息だぜ、しかし本人は氣の毒なもンだね、あゝいふものを今日社會の一部に歡迎するから、わいて出るンだよ、樹まづ腐りて蟲これに生ずだらう」
「あの蟲聲、をり〳〵人の談話を横合から聞き嚙ッて、それが自分の何かに

觸れると、すぐ向う見ずに出掛ける こいふ、わるい病ひが御坐いましてね」
「何かに觸れるンぢやアない、大體に氣が觸れてるンだらう、はゝゝゝ蟲聲は蟲聲として君、今日、どういふ用で」
「御無沙汰の、おわび旁、實は今日、我社の使者として伺ひましたが」
「一個人の君でなく、新聞社の使者として、はてね、全體どういふ事で」
「つまり簡單に要領だけを、實は貴君を我社の記者として、お迎へ申したいので」
「ふゝウ、この松川を、新聞記者に」
「さやうです、子爵家の御相續人では却ッて雙方に困りますが、今日の貴君として職業中の最も高等なる職業、社會の木鐸たる新聞記者は、決して御名譽を損ずべきものでないと信じて居ります、無論また我社としては出來得るかぎり、御優待する覺悟で、もし御承諾を戴けば、あらためて社長が

直接、伺ひますが、いかゞで御坐いませう」
松川廣行、おもはず腕を組ンで、暫し兩眼を閉ぢしが、閉ぢし兩眼を開くと共に、護謨人形の如く首肯いて、
「おもしろい、新聞記者は面白い、愉快だ」
「是非、御承諾を」
「いや、面白いには面白いがね、卽答は出來ないよ、考へた後でなければ」
「いづれ萬事の御都合も御坐いませうから只今、すぐ御卽答を願はずとも、お考へへの上で」
「ところで君、その考へ中が少々、長いよ」
「お長くとも、四五日の內には」
「はゝゝゝそりやア君、世間普通の考へ中だ、この松川は尠くも二三年、考へるせ」

「え、二三年」
「わるくすると四五年だ、まづ此方で考へるよりも、そッちで考ふべき事ぢやアないかね、いまだ曾て記者たるに何等の經驗もない初心、素人の松川廣行を、都下有數の新聞社として出來得るかぎりの優待に招くといふ必要は全體、どこにある、それが分らない、もし他より今日この松川廣行を見れば君、たゞ華族から平民になッた事と、たゞ帝大出身の法學士といふ、つまらない肩書のあるだけだらう、これで新聞社が出來得るかぎりの優待するといへば、その新聞社なるものゝ權威を疑はなければならない、天下萬人の最も羨むべき華族を去ッて富貴を捨つるに弊履を棄つるが如き法學士松川廣行氏を我社に聘せりといふ、この廣告だけでは君、あまり小兒だましで、あまり無意味ぢやアないかね、はゝゝゝいかにも新聞記者は面白い、男子、世に立ッて劔を握らざれば筆を執るべしで、宿志もし遂げずン

ば、この松川も寧ろ新聞記者になッて見ようと思ッてるが、その新聞記者たるまでに相當の道行があるからね、尠くも二三年、或は四五年、どうしても歳月の必要があるぢやァないか、考へ中とは君この、首を傾けて座蒲團の上に坐りながら考へる意味でないよ、第一また生活のために新聞記者たるは嫌だ、食ふために筆を執るくらゐなら鋤鍬を取ッて麥飯で生命を繋ぐよ、はゝゝゝ大體まづ以上の理由によりて、折角だが、お斷りする、あしからず社長に傳へて貰ひたい」

ぎやふンとまゐりし記者先生、今更ら眼を白黑にしながら、

「は、なるほど、貴君として、さうで御坐いませうな」

「まァ、からですな君、幾何お世辭よく饒舌ッても、これ以外に御愛嬌を呈する事が出來ない」

これで世辭よく愛嬌を呈したといふ、もし世辭愛嬌を取ッて退けて饒舌り出せば、いかに吹き飛ばさるゝかと俄に遁げ腰」

「いづれ、また其うちに伺ひますから」

「をり〳〵君、談話に來てくれ給へ、當分まだ此まゝに遊ンで居ますよ、いはゆる遊食の民でね、はゝゝゝ」

記者先生の去るや否、手を叩いてキタ女を呼び、

「午飯、午飯」

其五

千葉縣、佐倉の兵營勤務、陸軍中尉松川廣國、今年あけて二十七歳、廣行の廢嫡後は當然その子爵を嗣ぐべきもの、

その弟を佐倉に訪うて、宿に待ち受けし兄の廣行、

兄弟こゝに相對へば、別れても切れぬ骨肉の情、

「かうなるに付いては、幾度も泣いてくれたが、その時も今もいふ通り、この乃公には、何物も動かすべからざる理由と自信があッての事だから、祖先に對し父に對して、まことに申譯もないが、どうか、この我まゝを見遁して貰ひたい、また今日あらためて來たのは外でもない、そろ〳〵その理由と自信とを事實に現はすべき時機が近いて來たからね、これで當分、汝にも逢はない覺悟だ」

「は、よく、わかりました、廣國も今更ら女々しい、何事も申しませン、しかし兄さン、この廣國は軍人であるといふ事を御承知下さるでせうな、一朝もし國家に急あらば、死すべきものであるといふ事を、御承知下さると共に三男の廣正、あれば腹違ひの弟であるといふ事も、多少その間に、含ンで居て下さるでせうな」

「承知して居る、そりやア承知だ、萬一さういふ事があれば、この兄は自分一個のために祖先以來、連綿たる松川家の祀りを斷ッてまで、おのれの快感を恣にしない、しかし汝、腹は違ッても廣正は弟だぜ、この兄の目的を捨てるのは、その上だよ、もし汝に萬一の事があッても差支ないぢやアないか、さう小さく出ては、いかンね」

「いや、別に殊更、小さく出るンではありませン、同じ血にしろ、本腹と妾腹、家に取ッての輕重、いづれにあるかと、いふのです」

「その輕重論は暫く置かう、まア兎も角、二人の兄弟が家にあれば宜い、性行ともに華族として不似合の乃公は、去ッた方が家のためだ、つまり乃公が華族を嫌ッて出るよりも、華族そのものが乃公の存在を許さないといふ方が適當だらう」

「ぢやア廣國の輕重論と貴兄の適否論を、暫く此まゝに交換して置きませう」

「さうだ、ぐづ〳〵議論めいて要領を去ッた談話の迂り遠いのは、たゞ時間潰しの面倒ばかり多くて雙方、つまるところ何にもならない」

「實は、をり〳〵、初音町とかへ、伺ひたいンですが、わざと差控へて居ります」

「いや、來ずに置いてくれ、過日から父が二三度、内々で來られたがね、有難いは有難いが、寧ろ苦痛だよ、汝にしても、いよ〳〵戰鬪に出るといふ場合、情に泣かされるより寧ろ泣かされない方が、よからう、それと同じだ、これから社會に打ッて出る乃公として、なるほど、あの目的のために家を出たかといはるゝまで一切、來てほしくない」

「その邊、よく了解しました」

「ぢやア、これで、別れる」

「ステンショまで、お送り致しませう」

「なアに、入らない、よけいなこッた」

「では此まゝ御免を蒙りますが、兄さン、お寫眞を一枚、送ッて下さいませンか」

「寫眞、屋敷に幾枚も殘ッてる筈だ」

「貴兄のでなく、外に一枚、まだ、お目にかゝりませンからね」

「持ッて居てくれるか」

「麁末には、致しませン」

「おくる、すぐに撮らして、おくる」

洒々落々として快活なる兄の廣行、軍人氣質の恬淡に育ちし弟の廣國、互に男らしく手を握ッて相別れしが、寫眞の一語には、兄弟おもはず一滴の涙、

汽車は午後四時に佐倉を發して、廣行の性行、寧ろ三等の面白きも待合の混雜を見て二等に乘り込み、片隅に背を埋めながらステッキを股に夾み腕組みを添へたるまゝ千葉に著きしころ、どやどやと入り來りし五六人の客を何心なく見れば、その中に一人、差對ひに腰うちかけし老爺は、正しく木戸幸四郎の鬼幸、

いづれ千葉にひとごろしの歸途、赤切符も誤魔化すべき奴が此室へは、いふまでもなく一等の住復旅費と夕飯の代まで拵ぎ取ればこそ、ことし六十の阪を越せど慾の皮に膏ぎッて皺もない赤面、

あけても暮れても他人の身代を餌食に覘ふ熊鷹眼を光らし、泣いても嘆いても空を嘯くに馴れた禿頭、吸ひ餘りの紙卷莨を耳に挿み、古びたる手提げの小カバンを兩手に押へて膝に上せ、ひよいと見る眼の前には松川廣行、

去年の暮に沸湯を呑まされて、ぶる〳〵身を顫はせしほどの遺憾はあれど、實

は内心その手並に驚きし鬼幸、まして今は滿員の汽車中、うか〳〵すれば何を吐すか知れぬ相手と、横を向いて無言に窓の外を眺めながら、絶えず尻目に、じろ〳〵、

今日の境遇、こればかり氣にせる妻の諫言に、いたづら一切は禁物の折柄、もし去年は失敬といへば、いかに殘念でも、どう致しましてと、いふべき場合の鬼幸なれど、膝と膝と一尺も離れぬ眞正面に此老爺を見れば、自然に手の出る小兒の玩具に等しく、堪へきれぬ例の廣行、むら〳〵と湧く面白さに、あたり構はず、だしぬけの大聲、

「やァ鬼幸先生、暫く、どうだね近來は、いくら高利貸でも君のやうに太くなると人を苦しめるのみでなく、たまには人の急場を助ける事もあるだらうなァ、はゝゝゝ」

流石の鬼幸も、はッと思はず不意に胴腹を蹴られし心地、されど元來が鬼とい

はるゝ都下第一の強か者、あれが兼て聞き及ぶ名高い鬼幸かと一室の滿員に蛇蝎の如く視線を注がれて、もはや遁げも隱れも出來ぬ以上は、わざと平氣に向き直りぬ、

「何、鬼幸、木戸幸四郎といふ戸籍面に立派な名があるンだぞ、また高利貸が、どうした、借りる奴あッて貸す職業だ、ふざけるな青二才奴」

「はゝゝゝ間違ひのない事を言ッた筈だに、酷く怒ッたね、さう氣に觸へなくッても宜からう、なるほど君の年齡に比べると青二才だ、はゝゝゝしかし此青二才に去年の暮、背負投げを食ッたのは氣の毒だッたよ、あの時の五千圓、外で幾何になッた」

「よけいな、お世話だ」

「はゝア冗談かと思へば全く、怒ッてるな」

「華族の種にも、きさまの樣な生れ損ひが出來るからね、油斷のならない世の中だ」

「いや今ア華族でない、平民だよ」

「平民でも、そンな圖太い白無垢鐵火ア居るまい、もし食へなくなりやア何をするか、知れた奴でない」

「それこそ、よけいな世話だ、食へなくなッても金を借りに行かないから安心しろ」

嚙ンで吐き出す如くにいはれて、みる〳〵顏面は烈火の鬼幸、おもはず腰を捻り首を振りし拍子に耳へ挿める吸ひ餘りの莨を振り落せしが、今この場合にも本性を失はぬ奴、はッと我しらず手を伸ばして拾はンとすれば、ころ〳〵と脚下へ待ち受けし廣行、ぴしやりと踏み潰しぬ、

「や、この野郎」

額越に睨み上ぐるを、はゝと笑ひながら袂より金口のエムシー五六本を掴み出

だせし廣行、掌に上せて差出しぬ、
「折角の吸ひ餘りを踏ンづけて濟まない、さア辨償する、いくら强慾でも、これで不足なからう」
びしやりと其手を叩き落せば普通の人間、差出だせし五六本を悉く奪ひ取りて、
「よし、堪忍してやる」
これが雙方たゞ二人の喧嘩でなく、殆ど滿員の乘客、いづれも片唾を呑ンで、見物の眼前、怯めず臆せず、じろ〳〵と見廻しながら、
「一文の稼ぐ事も知らずに、かういふ莨を煙にするとは、冥加の惡い奴だなア」
乘客、あッと呆れて互に無言の顏を見合はし、本人の廣行また急に腕を組ンで感に堪へたる體、
「迚も凡人ぢやアない」

汽車の稻毛に着くや否、兩國の終點まで行くべき筈の鬼幸、ふいと俄に飛び降りぬ、
やはり遁げ場さへあれば遁げる奴、あれでも多少まだ凡人に似たところあり、鬼幸の遁げ出だせし後は、乘客の視線を一人に浴びし廣行、中には親類か朋友の怨恨でもあるか、頻に痛快を叫ンで拍手喝采するものあれど、今更ら思へば我ながら馬鹿げたり、
もし喧嘩の相手とすれば、たとひ勝ッても手柄にならぬ奴、加之も吸ひ餘りの朝日一本にエムシー五六本を取られしは利に於て負けたる我、いよ〳〵馬鹿げたり、
いづれにせよ、天下に面白い事の多き今日、高利貸たゞ一疋を翻弄して面白く感せし我、あまりに馬鹿げ過ぎたり、
兩國のステーションへ著くや否、一時に吐き出されしプラットホームの混雜に

紛れて、廣行また遁げ出しぬ、

「良人、今日、どこへ入らッしやいましたの」
「ちよいとね、急に思ひ付いた事があッて佐倉まで、久しぶりで廣國に逢ッて來たよ」
「おや、佐倉へ、かげながら承りますばかりで、まだ御意を得ませンが、御機嫌よろしう御坐いますか」
「むゝ達者だ、相變らず元氣だよ、汝、やはり廣國の事を、何とか思ッてるかね」
「そりやア良人、お目にかゝらなくッても、良人の御舍弟で御坐いますもの」
「や、汝の氣として、さうだらうな、實はね、廣國も汝の事を思ッてるぜ」

「あら、まア、お優しい事」
「性質、さッぱりとした奴で、猶更ら軍人だからね、べちやべちや饒舌らないが今日、別れる時、あの無口な奴が、汝の寫眞を一枚、くれというたぜ、麁末には致しませンというたぜ、至急、撮ッて、送ッてやれよ、嫂だ」
いづこを佐倉の方角とも知らず、たゞ暮れ行く軒端より家外の空に對うて、無言のまゝ涙の顏を下げしキタ女、これを見る良人の廣行また無言のまゝ顏を反けぬ、

其六

郵便といふ聲に投げ込みし一枚の端書、キタ女まづ小婢より受取りて見れば、同窓會よりの案内狀、麹町區下六番町松川廣行殿とせし上に、張紙して、下谷

區谷中初音町三番地山村キタ方へ轉送と書し、その下に朱肉の角印は、松川家執事の五文字、

たれ憚らぬ父上さへ御老體を馬車にも召さず、わざ〳〵こゝへ忍び來まして此身を我子の妻と憫れみ給ひ、まだ御目にかゝらぬ弟御さへ、かげながら此身を他人とは思召さず此身の寫眞をと優しう慰め給ふに、その家の召使はるゝ人として呼捨てに山村キタ方とは、あまりに恨めしく、なさけなく、口惜しけれど、これを此まゝ良人に見せて渡す妻でなし、

そッと人しれず張紙を取りて袂へ丸め、二階へ持ち行けば、

「ふゝゥ、同窓會からだね、久しく出た事がない、今年は一度、出て見ようかなァ」

「學校時代の、お友達ばかり御會合なさるンですか」

「さうだ、同時に卒業したものばかりで、四十一人の内、今この東京に、半分ぐらゐ居るだらうよ、こりやァ番町の方へ來た端書だね、こゝへ來るには張紙があッたらう」

「はい、御坐いました」

「それを、どうした」

「もう、入らないものと存じまして」

「入らないものでも、わざ〳〵取るに及ばない、どういふ工合に張紙を仕て來たか、つまらないこッたが、ちよいと見て置く必要があるンだ、書いたものを其場で捨てるとは、汝に似合はないこッたね」

「以後、氣を付けまして」

「しかし破ッて捨てもすまい、今のこッたから、どッか此邊にあるだらう、探して來い」

いつにない不機嫌も、實は大膽なる内に案外の細心を備へて、をり〳〵事と品

によれば嚴格の廣行、
是非、探して來い、ない筈はなからう」
キタ女、苦しげに袂より、丸めし紙を展べて良人の前、
「なンだ、袂へ入れてたのかい、早く出せば宜いに」
その張紙を見るや否、山村キタ方といふ文字に眉を顰め、一種異樣の眼を光ら
して、おもはず鳴らせし舌鼓、
「けしからン奴だな、かういふ、わからない馬鹿どもが揃ッてるから困る、
汝には氣の毒だッたね」
「いゝえ、何とも思ッては居りませン、御用さへ屆けば」
「まア堪忍しろ、暫時だ、今に、汝の下駄を直さしてやるよ、ね」
「はい」
「時に、同窓會へ出たもンだらうか、やはり今まで通り出ない方が宜いかね」

「それは良人の、お考へで御坐いますよ」
「いや、かういふ事は乃公の考へよりも、却ッて當り觸りのない汝の無意識
に極めた方が宜いね、すべての上に眞ッ直で邪氣のない汝は或場合と或意
味に於て乃公のため一種の暗示だよ、いくら止めても決行する事は決行す
るが、こンな事は汝の指圖に從ッた方が無事だ、下手な易者よりは、ずッ
と遙に眞理を含ンでるからね」
「ほゝゝゝ大道の賣卜者で御坐いますの」
「はゝゝゝそりやア兎も角、同窓會、どう仕よう」
「きち〳〵と今まで、お出にならないもンなら今年に限ッて、變で御坐いま
すね、もし今年お出になれば來年から必ず、御出席なさらないと、いけま
すまい、第一それに今こゝで、申さば御身分も何も、變る時で御坐いませう、
いッそ、もう一年このまゝ御見合はせ遊ばして、いかゞでせう、お友達と

御疎遠になる、ならないは別と致しまして」
「よし、止めた、時に汝、何日、寫眞を撮る」
「はい、撮る事は撮りますが、お言葉に甘へて、これがキタで御坐いますと直に、早速お送り申しても、あまり失禮のやうで、また遲くなれば猶更」
「そンな汝、よけいな心配は入らンよ、廣國は軍人だ、ほしいといへば早く送ッてやれ」
「恐れ入りますがね良人、近日また入らッして、お談話の後で、ついでに持ッて來たと」
「馬鹿な、當分まづ逢はないと約束して來たに、わざ〳〵汝の寫眞を屆けに行けるかい、それなら、本人の汝を連れて行くよ」
「ほゝゝゝ通常の手札形に致しませうか、四ッ切、カビネに致しませうか」
何でも宜い、早く撮ッて送れよ、しかし束髮より白襟紋付の丸髷にしてく

れよ、どうしても汝は純日本式の盛裝に限るよ、無論、半身でね、眞正面は、いけない、七分といふところを、三四通り撮るンだ、その内で乃公が見て、どれか一個、送ッてやらう」
遠慮しながらも胸に溢るゝほど嬉しきキタ女、うるさいと叱りながらも錦上に花を添へたき廣行、
「や、幸ひ丸髷だ、寧ろ寫眞には結ひ立よりも宜からう、ちよいと撫で付けて今日、すぐに、これから撮りに行けよ、毎日毎日乃公ばかり勝手に出歩くから、たまには氣晴らしに汝、ついでだ淺草邊でも歩いて來るが宜い、天氣も、よし、小婢を連れてね」
「まゐッても、よろしう御坐いませうか」
「いゝとも、今日は乃公が留守番する」
わざ〳〵鏡に對うて殊更に容色を作らずとも、うまれながらに天生の美人、た

だ一口に美人といふ世間の色香とは違ひしキタ女が、意を凝らし思を潜めて粧ひし風情、まだ晴がましく世に出でざれど今は心に唯憚らぬ松川家の五つ紋、なほさら奥床しく品位を添へ、自然の容姿を失はぬ黒羽二重の袷、しッとりと優美に和いで青みかゝりし首筋の生際いよ〳〵白襟に冴え渡り、手薄き此ごろの流行を逐はざる古代模様の帶、ぎゆうと固く身を締めて、胡粉を塗れるが如き單足袋の張り切りし脚下、わざと首を伸ばして差覗きし良人の顏に、くるり横を向いて微笑を隱せし頰の邊り、いはゆる神來の曲線美、人間業の裝飾一切を放れたり、

これ見よがしに透して時候を急ぐ當世風、その上より蟬の羽に似たる被布でなく、無殘に勿體なや、花を包むが如く惜し氣もなく、セル地の單衣コートを著流して、隻手を疊に跪きながら、

「まゐります」

「混雜の中は、なるべく氣を付けてね」

「はい」

すッと立ちし後姿、この名玉いづこに一點の瑕瑾ありや、天下の美術家に批評させたし、

わざと近處の宿俥を避けて三四町も先の辻俥二臺を走らせ、良人の敎へし寫眞屋に先客ありて一時間の餘を費し、やう〳〵淺草行の電車に乘れば、ぎッしりと滿員の中より美人優待の特志者三四人、おもはず立ッて吊革にブラ下りながら席を讓りぬ、

雷門に降りしは午後の二時過ぎ、仲店の往來に白髮の老爺まで振り返らせ、觀世音には我身より第一まづ專念に良人の上を願ひ、閑靜なる上野の森に馴れたる眼は、六區の繁華雜踏に召連れし小婢を振返りながら、

「賑かだねエ、まア大變な人、平常に出ないから田舍者と同じ事だよ、ほゝ

ほゝ」
「今日は奥様、土曜で御坐いますから、猶更」
「あゝ土曜だッたね、今日これで、あすの日曜は、どンなだらう」
「あまり向は混み合ひますから、此方の池の方へ廻ッて、あの茶店へでも奥様」
「さうねエ、あゝいふ中で揉まれるより、あの茶店で池を隔てゝ見た方がよかりさうだね」
花屋敷の前より横に樹間を縫うて、茶店の方へ歩み出せし背後より、不意の聲、
「おキタさン」
はッと驚きぬ、驚きも驚愕、この淺草の雑踏中、おもはぬ不意に我名を呼ばれて、
呼ばれし聲に振返れば、あまり近ごろ見ざる櫛巻の頭、洗ひ酒せし木綿袷に古

びたる半襟の四十女、はや山の端の摺り切れし晝夜帶に前垂がけのチビたる東下駄、浮世の下司馴れし氣輕に小腰を屈めて、にこ〳〵しながら、
「まア、おキタさン、大層、立派な奥さンに、おなりだ事ねエ、實は先刻から、もし間違ッちやア濟まないと思ッて、さンざ見直したンだよ、さうねエ、もう七八年になるもの、あの時分よりは猶お前さン、容色が上ッたよ、ほゝゝゝちよいと分らないくらゐだ、今、何處」
キタ女が十八の暮、あたら清淨無垢の身を毒蛇の舌に舐められンとして、今の廣行に救ひ出だされし頃、手を以て遮らねど口車に乗せて我身を敵の餌食に運ばむとせし女、現在は知らず其時は髪結のお留、
逢はずとも忘れぬ遺恨、にくい女と思へど、こゝは淺草の公園 すぐに人立の中、聞かせたくない下女を連れて、いやな事も言ひたくない辛さ、わざと絞り出す微笑を浮べて、

「おや、まア、どなたかと思ひましたに、お珍らしい事、久し〻、お目にかゝりませンでしたねエ、立話しも何ですから、兎も角あの茶店へ」

「私もね、おキタさン、その後の事に付いて、いろ〳〵お話し仕たい事がありますよ」

池の端の茶店に入りて、小婢を彼方の床几に隔てさせ、四邊を見廻しながら、

「やはり今、あの頃と同じ、御職業ですか」

「これといふ外に藝のある身ぢやアなしね、仕方なしに今ア千束町で、やはり手を油だらけにして居ますが、いやもう、さま〳〵な不運つゞきで、よく無事に今日まで來たと思ッてるくらゐですよ、しかしまア、お前さンは結構だね、お見かけ申したところで、さぞ御安樂なこッてせう、第一あの時分から汝さンは、どうも出世をなさる人に出來てたよ、爭はれないもンだねエ、私の思ッた通りだ」

「あら、困りますよ、さういはれては、ほゝゝゝ只、どうか、斯うか、暮らして居りますばかりで」

「御冗談を、時に只今お住居、どこですの、旦那樣は、どういふ方、今だから、いひますがね、あの時今まだ初心だと思ッて油斷して居た、其お前さンに皆が出しぬかれてさ、あッと言ッた後での評判に、あまり腕が冴え過ぎてる、どうも影で絲を引いて居たらしい人があッたといふ事でね、ほゝほゝおキタさン、その旦那でせう、つまり好いて好かれた人と樂しい苦勞の果に、めでたく添ひ遂げた御夫婦なンでせう、是非お伺ひ申したい事ね、ほゝゝゝ」

あの時、その後の事、實は我より問ひたさ聞きたさ山々なれど、これを問へば今の住居を問ひ返さるゝ身、これを聞けば良人の名もいはで叶はぬ身、たゞ此まゝ無事に別れても毒蟲に螫されし心地、うかとすれば鞘なき白刃を拘くが如

しと、キタ女、そッと身を捻りながら胸帶の間より五圓紙幣二紙、紙に包みし手許を、ちらと眼早く見て、

「ほンたうに、御立派だ事ねエ、昔馴染のお心易立に、つい、うッかり、お キタさンだなぞと、ほゝゝゝ」

「あの、これはね、ほンの、失禮ですが、お菓子に」

「まア貴女、およしなさいよ、そンな事は、いゝえ戴いたも同前、おや、さうですか」

「其うち、私の方から一度、おたづね致しますから、千束町のどちら」

「ごた〳〵と這入り込ンだ面倒なところですから、始めての方に、ちよいと分りませンよ、それよりも千束町の二丁目で、髪結のお留といへば」

「いづれ、また」

慇懃に挨拶を殘して、一圓の茶代と其に小婢を急がせ、其まゝ足早に山門の方

へ、をり〳〵見返りて、

まゝならぬ世の中、同じ思はぬ不意の逢ふ瀨ならば、觀自在とやら此土は御佛の靈地、このキタに生れて顏も得しらぬ父母あるを哀れと思さずや、せめて行方の知れぬ伯父ならばと、仲店の織るが如き群集雜踏も、何とやら果敢なき無常に淋しき心地、

また雷門より電車に乘る前、小婢を振返りながら、

「折角、樂しンで來て汝、つまらなかッたねエ、あす一日お暇をあげるからね、ゆッくり一人で、おいで」

「案外、早く歸ッて來たね、どうだッたい、久しぶりで面白かッたらう」

「はい、賑かでは御坐いましたが、もう淺草なンかへは以後、決して、まろ

りませン」
「なぜ」
「何故でも、キタは全體あゝいふ、晴々とした、陽氣な混雜の中へ出るやうには、うまれて居らないやうで御坐いますよ、やはり舊式に浮世の影で、淋しう暮らした方が、自分の性に合ッて居りますから」
「はゝゝゝ妙に悲觀したね、つまり馴れないからだよ、時に何か、おみやげは、神妙に留守番して居たせ」
「おみやげ、ほゝゝ大變な、おみやげが御坐いますよ」
「どういふ、みやげだ」
「ねエ良人、お留といふ女を、御存じで御坐いませう、髮結のお留、そら例の時、さンざ憎い邪魔を致しました、いやな女あの時分、常にキタの髮を結ッて居りましてさ」

「むゝ彼女」
「あれに良人、逢ひましたの、不意に呼び止められましてね、まア、どンなに驚愕いたしましたか」
「そいつァ驚いたらう、しかし何事もなかッたかね」
「いろ〳〵と變に、うるさく、からまッて來て、頻に只今の住居や何かを聞かうと致しましたが、あゝいふ女には良人お金が第一の魔醉劑で御坐いますからね、兎も角も、その場を無事に逃げて歸りましたが、全く一時、どう仕ようかと思ッて、ほゝゝゝキタの壽命は、たしかに一年を縮めました」
「うまくやッた、なアに六七年も經ッた今日、まして一點の疚しくないこッたから、たとひ、どンな事があッても大丈夫だがね、やはり面倒だ、はゝゝ久しぶりの娯樂が、ひどい淺草だッたなア」
「それに良人、彼女が淺草の千束町に、住ンで居るさうで御坐いますから」

「赤い佛の堂の後に白首の鬼が住ンでると聞いたが、そこで髪結といへば彼女、つまり鬼の角かくしを職業にしてるンだな、はゝゝゝしかし考へて見ると、乃公と汝が新郎新婦の寫眞を並べて、出したくもないが新聞へ出るやうになれなかッただけ、互の運命に多少の沈淵があッて、戀と愛は遂げても、やはり人生に一の缺陷だな、どこへ放しても押しても立派に自慢の出來る汝を、かはいさうに、年に一度か二度、たま〳〵の淺草で、あゝいふ女のため遁げて歸るやうにしたのは、乃公の罪だ、今日の淺草に限らず、どうしても乃公は汝の生涯に女一代の幾分を薄闇くしたやうだね」

「いくら世間に薄闇くッても、キタは、このキタは心の中で、あかるウく思ッて居ります」

あはや涙に曇らむとせしを、心機一轉の廣行、

「第一、どこへ出ても汝は眼に立つから、いけないよ、も少し、わるくッても乃公は堪忍したに、はゝゝゝ」

其七

乃公は汝の生涯に女一代の幾分を薄闇くしたとの一言、キタ女の身に取りては、あらむかぎりの榮華を盡して世間萬人に羨まるゝよりも嬉しけれど、またこの良人に眼を曇らせて現在かくいはせしかと思へば、妻の身として腸を割かるゝよりも猶更ら辛し、

かはいさうに年に一度か二度、たま〳〵の淺草で、あゝいふ女のため遁げ歸るやうにしたのも乃公の罪とは、勿體なや、年に一度か二度の淺草へ行かずとも、春の花、秋の月、君たゞ一人を守りて夢さら〳〵何の不足もない我身、あゝいふ女のため遁げ歸りしは、かう生れたる我身の不運、これを歎いて良人の罪と

するキタ思召してか、
色を賣り肉を鬻ぎて一時の虚榮に憧るゝ身ならば、たとひ心は闇くとも世に晴がましく孔雀のやうなる羽を伸して振舞へど、おもひし戀を遂げ情に包まれて生涯を樂しく送る身は、たとひ葉蔭に隱れて世は闇くとも人しれぬ心は晴れて靜けき我身、女一代いづこの誰を見習うて誰にか疚しく誰にか恥づべき、
肥馬輕車を驅りて文際場裡の夜會に招かれずとも、自動車を馳せて郊外春秋の花月を探らずとも、夜汽車の寢臺に夢を伴うて旅の空に都の香紛を誘らずとも、この上野の森影に朝夕の塵を避け、この借屋住居に衣食も足りて、この八疊と六疊の二階に身も狹からず人にも妨げられず、いつはりのない眞心に、をり〳〵は叱られ、隔てのない戯れに、をり〳〵は笑はれ、うかと事を仕損じて此女めと睨まるゝ時、おもひの外に譽められて汝なればこそといはるゝ時、その嬉しさ、その樂しさ、金殿玉樓の富貴にも代へ難く、世界の寶石を身に纏ふ

榮華にも代へ難し、
もしこれを、古き道德に囚はれしといへば、わざ〳〵我に新らしき道德を求めずとも、此まゝの境涯さらに何の不足もなし、もし過去の習慣に陷れりといへば、わざ〳〵人に囃されて立騷がずとも、我に將來の不安を來すべき恐れなし、たとひ舊思想に蔽はれても、新思想の自覺を叫ぶ用なく、たとひ生命に意義なしといはれても、これ以上の存在を認めらるゝ用なく、玩弄物といへば、玩弄物となるも恨まず、犧牲物といへば、犧牲物となるも悔いず、涙脆く心弱く世に後れても、自然に出る涙を止めて世に先だつ希望なし、
時代の思潮とやら、いかに我生涯を此まゝ踏み潰して過ぎ去るも口惜しからず、時代の要求とやらいかに、我運命を此まゝ餘所に振捨てゝ馳せ去るも口惜しからず、妻として良人に愛せらるゝ我身は、
都大路の流行を競ふデバートメントに出入せずとも、演劇興行の美を爭ふイル

ミネーションに照らされずとも、ダイヤの輝きルビーの光り眞珠の飾りに身を粧はずとも、神のみ知しろしめす我に人しれぬ幸福ありと思へば、人に羨まれて人に誇り、世間に持て囃されて世間に騒がるゝよりは、人に知られず心に誇りて世間に騒がれぬ我身、いかに樂しきぞ、

晴れて世に立ち世に唄はれながら隱れて袖に涙を包むよりは、晴れて世に立たず世に唄はれずして隱れし袖に笑を包む我身、いかに嬉しきぞ、

家庭の圓滿といふ事を、さも難しげに敎へ敎へらるゝ人の哀れさよ、一夫一婦といふ事を、さも業々しげに問題とする人の氣の毒さよ、戀愛の神聖といふ事を、さも珍らしげに解釋する人の笑止さよ、

「ねエ良人、このキタは性來、かやうな行屆かない不束なもので何一個、こ

れといふ取得のない事ば自分ながら、よウく承知いたして居りますが、わけて其中で、どういふ事が第一の、疵で御坐いませう」

「だしぬけに妙な事をいふね」

「だしぬけでは御坐いません、絶えず常に、自分で、さう思ッて居りますから」

「はゝゝゝまづ女としては、無疵な方だらうよ」

「さう良人、水臭く他事のやうに仰しやらずと、これが悪いとか、それが汝、いけないとか、はッきりと、深切に」

「また變に、をかしな事を考へ出して來たよ、つまり善くないといへば汝、さういふ點が善くないぜ、乃公が何とも思ッて居ないに」

「思ッて居らッしやらなくッても、キタに悪いところのない筈は御坐いませ

ン」

「まるで、言ひ掛りだね、はゝゝゝ」
「だッて良人、さも蒼蠅く、面倒さうに、まア無疵な方だらうよ、それでは良人、さやうで御坐いますかと申し上げられますまい」
「いよ〳〵喧嘩腰だ、はゝゝゝぢやア折角の御尋問だから、いふよ」
「はい、どういふ事が一番、わるう御坐います」
「まづ汝の一番、わるいところは、涙だ、自分で物を思ひ過ぎて、何か事があると、すぐに涙ぐンで、其まゝ默ッて仕舞ふだらう、あれが汝、よくないね」
「ほゝゝゝ泣蟲が、いけませンの」
「泣蟲も聲をあげて、わあッと陽氣に泣き出すのは、或場合と或意味に寧ろ滑稽で、いゝがね、汝のやうに、胸に迫ッた事を、じいッと堪へて、その張り切ッた眼に一ぱい今にも落ちさうに溜めて居ながら、さて落しもせず

流しもせず無言に脣端を嚙み占めて、差俯くだらう、あれが乃公のため實に一種の責め道具で、をり〳〵あれを遣られると乃公は閉口だよ、二の矢が繼げない、いくら怒ッて居ても腹が立ッても、何だか妙な氣になッて、刀向ふ事が出來ない、あの泣き工合は、汝の身に取ッて千人力だ、考へて見ると、つまり汝の涙管は眼に出るまでの間、頗る流通よく出來てるが、眼の邊に何か堰き止める障碍物があッて流れないンだな、いはゆる涙の淵瀬、あれが一時に流れ出せば、それこそ涙瀧の如しだ、はゝゝゝ」
「もうキタは何事も申しませン、泣くにも世間普通の一人前、滿足に泣けないやうなもので御坐いますから」
「おい〳〵、さうでないよ、さう取ッては困る、天下萬人の涙よりも汝の眼に溜めた一滴に、強い力があるといふこッたからね」
「よろしう御坐います、強くッても、弱くッても、どうせ、御冗談の、お笑

ひ草になるキタですから」
「さア、また喧嘩の出やうが違ッて來たぞ、今日は汝、どうしたンだい、何事にも只、はい〳〵といふ汝が今日に限ッて、いち〳〵搦まるぢやアないか」
「いち〳〵キタが搦まるンで御坐いませン、わざと良人が搦ませるやうになさるンです」
「おい、ちよいと此邊で休戰しよう、これぢやア際限がない、世の中に自分の善いと思ッてる事を惡いといはれて怒る奴はあるが、自分の惡い事をいうてくれないため腹を立てる奴があるかい、はゝゝゝ」
「何事でも良人は、すぐ御冗談になさるからです、良人の一番お惡いのは、それで御坐いますよ」
「はゝゝゝ今度は乃公の惡い方に廻ッて來たね」

「全くで御坐います、どれが眞面目か、どれが冗談か、眞面目と冗談の境が、ごちや〳〵で少しも分りませンもの」
「はゝア、それが乃公の一番、わるいところだね」
「いゝえ、まだ外に澤山、御坐いますよ」
「まだ外に澤山あるウ。ついでだ、すッかり擧げて見ろ」
「あまり澤山で御坐いますから、控へ帳を出して見ませンと、ついでぐらゐでは迚も數へきれませン」
「はゝゝゝつまり自分の惡い事を一個か二個、いはして置いて乃公の惡い事を、うンと並べる筈だッたンだね、そンな顏をして居て汝は、なか〳〵油斷のならない腕があるよ、いはゆる寡を以て衆に敵するの策を得たりだ、危險、危險」
「はゝゝゝもし危險で策のあるやうなら、また少しは御用に立つ時も御坐い

ますが、つまり藥にも毒にもならない、あッても無くても、かまはないキタですから」

「どうして、どうして乃公のためには萬病これ一服の名藥だ、もし汝がなけりやアこの松川廣行、或は一代の放蕩兒になッたかも知れないぜ、汝といふ名花一輪があるから、いくら春めいても餘所の花見は仕なかッたよ、はは丶丶」

「こンな日蔭に咲き損うた草花よりも御遠慮なく立派に晴々とした、お花見を遊ばせば宜しいに、とンだまア、お妨げを致しました事」

「や、此ごろは汝、なか〳〵うまくなッたね」

「何がで御坐います」

「何か知らないが、うまくなッたよ、的がなくッて此くらゐだもの、もし實際に的でもありやア、それこそ大變だ、どンな目に逢はされるか知れない、恐るべし恐るべし、は丶丶丶」

「どうとも、お好きなやうに、お笑ひ遊ばせ」

「時に今夜ア散歩がてら、ぶら〳〵上野の廣小路邊を歩かうと思ッてるが汝、同伴に行かないか、いろ〳〵と面白い露店が出てるぜ」

「さやうで御坐いますか」

「困ッたなア、いよ〳〵御機嫌を損じて仕舞ッた」

其八

都下第一の高利貸、本所割下水の鬼幸、あけても暮れても手に放さぬ算盤と膝の上に突き立て、取るだけの利息を取りあげて足らぬところを證文に書き加へし後、さてと向き直りしが、向き直られし客は田島辯護士、法學士の肩書も法

廷の才物も此奴の前では一文の價値なし、

「まア兎も角これで田島さン、一段落は付きましたが今後、かういふ面倒ア事は無いやうに仕て下さい、第一また手數が多くて困りますよ」

「困るのは其方より此方だ、さンざ高利の拂ッた勘定殘りを證書に書き加へて、その上また面倒だとか手數だとか、すきな不足をいはれるンだからな、はゝゝゝ世話アない」

「しかし田島さン、貴君の方で約束通りに仕ないから自然、かうなるンでさアね、かうならないやうに、すれば宜いぢやアありませンか」

「仕たいよ、いくら仕たくッても出來ないから仕方なしに已むを得ず、せッせと嫁いで君等の土持をするのさ、考へて見ると長らくの間、神妙に運ンだよ」

「はゝゝゝわざ〳〵頼ンで仕て貰ッたやうですな、全體この頃の人は間違ッてる、早い談話が親でも兄弟でもない無縁の他人に金を借りて怒るンだから、よほど儲からないと貸す方に割が悪い」

「あまり惡くもない筈だ」

「いや、よくもありませンぜ、骨の折れる事は一通りでなくッて、加之も中には、隨分、ひどい奴がありますからな、時に田島さン、ひどい奴といへば例の松川、彼奴、あれぎりですかね」

「あれぎりにも、なンにも、ありやア手に終へない、流石の僕も二度と再び盛り返す勇氣がないよ、ことしの二月、たしか三日だッたね、うまく仕組ンだ例の一件で、九分九厘まで首尾よく落ちて來たから、こいつ占めたと手形の裏書、いよ〳〵三千圓といふ段になッて吐す事が癪だ、君も運の惡い男だね、せめて一月か二月前に來りやア同じ級から出たンだもの、お易い御用だ何でもないに、遲かりし由良之助で判官殿、もう切腹して仕舞ッ

た、かねての廢嫡決定、明日から無資格無資産の丸裸一貫だ、もし置いてくれりやア君の玄關番にでもなるよと、かうだ、おまけに、どッかへ圍ッてある情婦の恍惚まで聞かされて歸ッたが、ありやア無效だ、根が華族で無遠慮に馴れた上、人を馬鹿にする調子があッて、づう〳〵しく度膽の太い奴だから煮ても燒いても食へない、うか〳〵すると此方が三盃酸にして食はされさうだ、はゝゝゝしかし廢嫡は實際で、全く屋敷を出たといふこッたが、此間あッた我々の同窓會へも面を出さない、無論、最初から一度も出席した事のない奴でね」

「田島さん、實ア其後、私が逢ひましたよ」

「どこで」

「千葉から歸りがけの、汽車の中で」

「そいつア面白かッた、君のこッたから、まさか其まゝ默ッちやア置くまい」

「ところが、面白くありませンよ、此方より先に彼奴の方が默ッて居ませンからね、加之も狹い二等室で、ぎッしりと詰ッた滿員でせう、その中で野郎、だしぬけの大聲に、や、吐した吐した、かりにも大名華族の種に生れた奴が、よくまア、あゝ毒々しい事を淀まずと順序よく吐しやアがッたもンだ、もし汽車の中でなきやア年は取ッても私だ、あのまゝ無事に置く奴でない、去年の暮といひ、今度といひ、その以前この私を新聞の黑枠に入れて死ンだ廣告した惡戲も、きッと彼奴に相違ありませンな」

「はゝア、よほど酷く、やられたね」

「酷いにも田島さン、物事は宜い加減といふ程度がありますよ、考へれば考へるほど殘念で堪らない、思ひ出せば出すほど心外だ、少々の資本金をかけても彼奴だけは是非、復讐して見たい、誰か田島さン、彼奴の鼻ッ柱を捻ぢ上げる人間はありませンかね、五十錢や一圓の日當は出しますぜ」

「はゝゝゝ君が日當を出すといふくらゐだから、よく〳〵のこッた、一通りや二通りの殘念さでないね、外の人の生命がけと同じ程度だ」

「冗談ぢやァない田島さン、全くだ、全く日當を出しますぜ」

「それほど殘念で堪らなきやァ、どうだね勇を鼓して僕が、も一度、押掛けて見ようか」

「どういふ工合に、押掛けますなら」

僕の押掛ける工合より、君の僕に對する工合を、どうしてくれる、いくら貧乏しても、この田島ァ五十錢や一圓の日當で動けないよ」

「ぢやァ田島さン、思ひ切ッて、かう仕ませう、もし貴君が押掛けて、うまく野郎を深水へ落し込ンだら、一月、空にする約束で」

「一月、空にする、どう空にする」

「どうッて、一月ですよ、今の勘定で書き直した元金八百五十圓の證書面でせう、その三月二割で百七十圓の一月分、つまり五十六圓六十六錢六厘、あとは切り捨てませう」

「はゝゝゝかうなッても流石に君だ、實に恐れ入ッた細いもンだよ、しかし一月分の利足五十六圓六十何錢ぢやァ動けないね、はゝゝゝ」

「さういふ田島さン、貴君は慾しらずだから困る、貴君だッて彼奴のため現に今年の二月、いはゞ手玉に取られて來た怨恨があるでせう、わざ〳〵何も私のため賴まれるばかりでもない事に五十六圓六十六錢六厘といふ錢が、不意に儲かる仕事ぢやァありませンか、長年の取引上、おついでに無代で仕て下すッても宜い筈だ、どうです、いッそ無代で働いて貰へますまいか、その代り三個月の返濟期限を文句なしの六個月に延ばしませう」

「はゝゝゝます〳〵手嚴しいな、いや實はね、日當も入らない一月の利息も、まけてほしくないが、今度もし押掛けて、うまく彼奴に連帶さすとすりや

ア、幾何、貸せる、彼奴を今の境遇としてだよ」
今の彼奴では、貸せませンよ、ありやア華族で子爵の相續人となッてる時の價値です、叩き出されて丸裸になッた以上、逆さに吊ッて本人の鼻血ぐらゐ出るかも知れませンが、私の算盤からア三文も出ませンね」
「いやさうでない、松川家は子爵中の第一で華族中の財産家だ、その長男として、どういふ工合に廢嫡されたか、よし廢嫡されたにしても、そこは君、世間普通たゞの家を追ひ出された馬鹿息子ぢやアないよ、第一また今日の境遇になッたのが寧ろ僕の乘ずべき點で、なアに、まかり間違へば廢嫡されて居ても松川家の玄關へ吐鳴り込む手段と方法は、いくらもあるさ、また今日の本人、どういふ生活狀態か、それも實見した上で算盤に這入らないとも限るまい、兎も角も君に損をかけず僕の八百五十圓を元利もろとも彼奴に背負はして來て、たしかに取れるといふ證據を擧げてくりやア、よから

う、どうだね」
「なるほど、おもしろい、田島さン、それなら宜しい、それで野郎を、ぎゆう〳〵いはしてやりたい、考へて見ると廣嫡されても彼奴、元の友達で今日まだ交誼の好い華族の三人や五人、持ッてるでせう、からさういふ奴に連帶さして、別に大きい口を二件三件、やりたいもンですな、こりやア田島さン、貴君の分を彼奴に背負はせるだけぢやア聊か物足りない、うまく彼奴を乘せて、その外に大きく別口で、やるに限りますよ、はゝゝゝ」
「そろ〳〵慾の方が勝ッて殘念な方を忘れて來たンぢやアないかね」
「忘れは仕ませンが、もし面白い儲け口がありやア其間、ちよいと暫く殘念の方を中止しますね」
「殘念の中止は、よかッた、こいつア振ッてる、はゝゝゝ」

其九

ぶら〳〵と歩くにも、たゞぶら〳〵と動くのみでなく、その足を運び身を運ぶ生理上の運動以外、人しれぬ頭腦の中も何等かに向うて進みつゝ運び行く松川廣行、机の前に腕を組んで小首を捻るよりは、

また今日も例に依ッて午後の散歩、ぐるりと池の端を巡りて東照宮の阪を上り、五重塔の此方に聊か草臥れし身をステッキに支へながら、エムシーを口に咬へて袂のマッチ、幾度か風に擦り損ふ折しも、

「松川さん」

呼ばれし聲は耳に入れど、慌てゝ振向きもせず、また二三本マッチの火を風に取られ、やう〳〵莨に煙を吹いて後、悠々と徐ろに見返れば、田島辯護士

はや眼前に近く小腰を屈めて、滿面の微笑、

「先達は失禮しました、あれ以來の御無沙汰を、お詫び旁、實は明日お伺ひ致さうかと思ッて居りましたところで」

「やア、あの時は僕の方が失敬でした、折角の御依賴を、しかし今ア番町に居ません也」

「いや現今の御住居、承知して居ります、今朝お屋敷の方で聞きましたから」

「はゝゝ浪々の遣る瀬なさで、暫し浮世を忍ぶ假の宿といへば、いかにも洒落てるが實際なか〳〵洒落どころでなく、いよ〳〵自分に働いて食ふとなりやア蒼蠅い面倒なもンですな、時に田島君、わざ〳〵來られるに及ばない、もし明日、何か用があれば幸ひ其用を歩きながら、今日こゝで聞きませうか、この上野を自己の庭園でも散歩してる氣でね、はゝゝゝ」

「相變らず、潑溂として實に元氣なもンですな、しかし歩きながらは少々、

あまり庭園が廣すぎますよ、はゝゝゝ」

「ぢやア、どッか、茶店でも」

いへば此まゝ思へば直に先立ちて、のそ〳〵と歩み出し、わざと奥まりたる座敷建築の茶店に入らず、春の花に取殘されて色の褪めし茶毛布の床几に腰うちかけ、

「田島君、こゝが宜い、どうです新緑の葉影、たまらないね、かうして地の上へ樹の間から漏れて來る日影の工合、何ともいへない心持だ、花よりも月よりも僕は春夏の交に最も愉快を感ずるね」

うす汚き婆の持ち出す出がらしの澁茶を啜り、まだ殘る莨の煙を心地よげに吹きながら、

「時に田島君、どういふ用です」

「かういふところで、お談話するのは甚だ何ですが、是非、御工夫を借りたい事が御坐いましてね」

「工夫、自分の一身上さへ、實は工夫に困ッてる時ですよ、その僕へ工夫を借りたいは、聊か見當違ひぢやアありませんかね」

「いや、決して違はない心算で伺ひました、工夫は分量と程度の問題で、同じ困り方にも甲と乙の相違がありますから、さし當り田島の願ひたい工夫は無論、貴君の工夫を妨げるほどの事ではないと、考へましてね」

「はゝア、なるほど、さういふ意味ですか、つまり先達は金を借りに來て今日は工夫を借りに來たといふ理由ですね、よろしい、わかりました、あの時は生憎、あンな場合で奈何せン、金は折角の御依頼に應じられなかッたが、もし僕の頭腦で出る工夫なら御遠慮なく、ふンだんに使ッて下さい、しかし自分の事に使ひ過ぎてる後だから、あまり宜い工夫が殘ッて居ますまいよ、失敬ながら、もし使ひ餘りで御用に立てばです、全體、どういふ

こッてす」
「いはゆる滔々たる辯で、どうも貴君には一歩、いつも機先を制せらるゝやうな氣がして」
「はゝゝゝ滔々たる辯は君の方が本職でせう」
「その本職が、やられますよ、はゝゝゝところで外の人と違ひ、貴君に向ッては寧ろ、露骨に要領だけ」
「露骨、要領、簡單、それに限りますな」
「結局、お願ひする點は、やはり金に歸著しますが、しかし直接に金そのものではありませン、つまり金を産み出すべき工夫で」
「さア直接でも間接でも、金といふ事になれば殆ど零で、いくら上手に使ッても此奴、使ひ道のない人間ですせ、はゝゝゝそれとも君、もし金に對する廢物利用が出來れば寧ろ僕の方から、その工夫を願ひたいもンだ」

「こりやア恐れ入ッた、金に對して人間の廢物利用は實に警句だ、はゝゝゝしかし其處が分量と程度で、貴君ア自分に廢物と思ッて居られても、この田島から見れば決して、どうして、廢物どころですか、なか〳〵まだ立派に通用しますよ」
「お世辭は止して田島君、この松川まだ金に對して、全然これ廢物でないとすれば、つまり、どのくらゐの信用があるでせうな」
「そりやア貴君、一萬でも二萬でも、貴君の御工夫と御決心次第です」
「ところで、君の僕を利用する額はどのくらゐです」
「なアに、ほンの僅で、さし當り二千圓もあれば目下、大に助かります」
「なるほど、僕に一二萬の工夫が出來て、その僕に要求する君の必要が差當り二千圓とすれば、何でもない、まづ一割だ」
「さうです、わづか、その一割に殆ど苦心慘憺を極めて居りますよ」

「そりやァ氣の毒だ、ぢやァ田島君、どうです、僕は君のため幾何でも利用されるから、まづ僕に二萬圓の出來る工夫をして下さい、もし二萬圓、出來れば其三割、二三の六千圓を君に呈しませう、失敬だが手數料として、また僕も不意に一萬四千圓、懷中へ這入れば當分、樂だ、先達は君、かういふ工夫も何もなくて、只あゝいふ場合に金を借せと迫るから無理だよ、あの時だッて今日のやうに君、うまく僕を利用して出來るやうにすれば出來たかも知れない、考へりやァ君よりも寧ろ僕の方が殘念だッた」

「いかにも、さうでしたなァ」

「あまり君が自個本位で來たからさ、やはり世の中は相手も助けて自分も助かるといふ、いはゆる雙互關係の利益上より誠實に割り出した工夫でないと無效だ、いけない」

「全くです、はゝゝゝ時に今いふ二萬圓の工夫ですが、誰か、外に、相當の

人が御坐いますまいか」

「外に相當の人間とは、僕の外に君、まだ人が入るンですか」

「つまり貴君の連帶者で、以前の御朋友か何か」

「や、君、ちよいと待ッた、それぢやァ談話が違ッてる、僕は僕一人で二萬圓の金が出來るもンと思ッて居たから、その手數料として君にも六千圓を出すと言ッたが、わざ〳〵外に人を賴ンでまで僕ア金を作りたくない、第一また連帶といへば證文を書いて借金するこッたらう、はゝゝゝそれは君、工夫でも智惠でも手柄でも何でもない、貸す貸さないは偖置いて世間普通いやしくも金を借りようとする奴の一般に誰でも考へる藝當だよ、はゝゝは大變な勢ひで眞面目に仔細らしく工夫工夫といふから、どンな神算鬼謀かと思ッたに、やはり借金の意味だッたンだね、なあンだ馬鹿馬鹿しい、元の友達を義理詰の連帶者にして高利の金を借るぐらゐの事は田島君、わ

ざ〳〵君に敎へなれなくッても承知してるさ、しかし松川廣行、金を借りるに他人の信用まで借りて金と人との二重借なンかァ斷じて仕ない、この理論からいふと僕に對する君は三重借り四重借りを目的にして來た人間だよくないねエ、加之も君、借金は金のない奴が苦しまぎれに、すべきもンでない、金のある奴が、何等かの事業上、その足らざるを借りるもンだ、のみならず返す的のない借金は欺僞取財で、約束の期限を過ぎても道德上に於ける一種の犯罪だ、や、うかうか饒舌ッた、この邊は君の講釋する領分だッたね、はゝゝゝ兎も角も君、金を借りる事は一切、御免を蒙らう、また君も僅千や二千の端金で凌げるやうな苦勞なら、寧ろ金で凌がずに努力奮鬪して凌いだ方が宜からう、借りた金を返すのは、働いて儲けるより一倍の力が入るといふこッた、もし借りもせず働きもせずに出來る工夫があれば君、その時こそ敎へに來てくれ給へ、田島君これで失敬するよ、牛憎散歩の途中を引き止められたから持合はせがない、こゝの茶代を君、たのみますぜ」

すッと其まゝ後も見返らず、のそ〳〵と立去れば、取殘されし田島辯護士の呆れ顏、眼は白黑に面は赤くなり蒼くなりて、

十二三間の先にて俄に立停りし廣行、こゝで振返るかと思へば、吸ひきりし莨の火を新らしき莨にうつして、また其まゝ歩み出だしぬ、

初音町への近道あれど、時間の割合に運動の足らざりしか、わざと博物館の前より動物園の横に出でし時、彼方より來かゝる一人の男、いはゆる破帽弊衣の語を遣憾なく實際に現はして、加之も病後の落魄、みる影もなき書生體、道を避けて行き過ぎむとするを、すれ違ひに振返りし廣行、

「やァ君、安藤君ぢやァないか」

ずッと立寄れば、顏も得あげず、居縮むが如くに差俯いて

「松川君ですな」
「どうしたンだい君は、久しく逢はンねェ、二年までは同級だッたが、急に半途で去ッて仕舞ッたから」
「生意氣に妙な考へから、途中で學問を捨てたのが、やはり惡かッたンですな」
「はゝア、何か事業でも、やり損ッたンだね君」
「なァに事事の失敗だけなら、かうも酷く、なりませンがね、つまり放蕩の結果ですよ、さンざ馬鹿を盡した自業自得で、いはゞ當然の成行ですから、舊知の人々に對しても、汗顏の至りとか面目ないとかいふ程度を越して仕舞ッて、今ぢやア哀を乞ふ資格もありません」
落ぶれた奴にかぎりて、その落ぶれた理由に一種の申譯を加へ、さも不足らしく不平らしく愚癡を滾す筈なれど、たゞ自業自得の結果とし當然の成行とせし

一言、却ッて面白く氣に入りし廣行、ずッと差倚りて、
「君、病氣もあるやうだね」
「多少、脚氣のやうな點もありますが、大體は、營養不十分からですよ」
「今ア君、どこに居て、何をして、食ッてる」
「そこまで聞くのは、聊か殘酷ですなア、此まゝ別れさして下さい」
「いや、きくだけの考へがあッて聞くンだよ君、しかし殘酷だから止してくれは面白い、ぢやア是以上、押して聞くまい、時に安藤君、ちよいと其處まで僕と同伴に來てくれ、遠くない、つい近くだ、初音町まで」
「どういふ用です」
「まア何でも宜い、來るさ」
其まゝ手首を掴まンばかりに伴うて、我家の門口、五六間の此方に待たせ、急ぎ足に駈け込みしが、すぐに再び飛び出して、紙に包みしものを安藤の懷中へ

捻ぢ込みぬ、

「默ッて君、取ッて置いてくれ、決して君を侮辱する意味ぢやアないぜ、實は僕も廢嫡されてね、あれが今の住居だ、しかし君は現在の境遇を一轉して兎も角その落魄を脱し得るまで、たづねて來ない君と信じて此まゝ別れる、もし今日の君が一錢五厘を費して葉書の禮狀でも、よこすやうぢやア無效だぞ、しッかり、やれよ君、だが身體は大事にするが宜い、器を丈夫にして置かないと、さアといふ時に物を入れる事が出來ないからね」

「良人まア、何で御坐いますの、五十圓も、今あの人に」

「汝、見て居たのかい」

「さア出せ、そら出せと、あまり變ですもの、ちよいと二階から」

「安心したらう、女でなくッて、はゝゝゝありやアね、學校時代の友達で、あゝなッた奴に出逢ッたからよ、さう以前は親しくも交はらなかッたが、なか〳〵面白い點のある奴だ、彼奴あのまゝで凹垂れまい、どうかなるだらう」

「まことに結構な事では御坐いますが、これから良人、さう度々あゝいふ人を、お連れ遊ばしては困りますよ、只今の御身分で一口に五十圓といふお金は、ねエ良人、おわかりで御坐いませう」

「わかッてる、わかッてる」

「しかし、今の人は嘸、嬉しう御坐いましたらうね、あゝいふ風俗をなすッてるンですもの」

「だから考へて見ると、安いもンだよ」

「いくら良人お安くても、この後は、いけませンよ」

「はい〳〵、かしこまりました」

其十

度すべからざる不孝の子も、行末を案じらるゝ不肖の子も、世間の他人には知られぬ涙の親心、

まして有餘る財産と名譽の家に不肖ならぬ子を持ちて、その子また不孝ならざるに家を去り産を嗣がざる親心、なほさら世間の他人に知られぬ涙深し、

加之も其子の妻なるもの、しッとりと睡れる如く靜なる中に物事の疎からぬところあり、いぢらしく打沈める哀れの中に心の雄々しきところありて、天生の容貌さらに畫ける如き風情、どこに一點の瑕瑾なき珠玉とすれば、この夫婦を家の外に置いて朝夕に見られぬ親心、老の寢覺にも忘らるべきや、

番町の屋敷に奥深く老の身を持て餘せし松川子爵、急に座を立ち手を叩いて、

「これ、誰か居るかな」

廊下を通りかゝりし三太夫、障子を開けて闕際に、

「は、何か御用で」

「乃公は今日、これから出るよ」

「お馬車を」

「いや〳〵、歩いて行く」

「いづれへ、お供を申し付けます」

「供は入らないが少々、金が入る、出してくれ」

「お徒歩では、あまり、また金子は、いかほどで、どういふ事に御入用で御

坐いますか、一應」
「どういふ事でも、乃公が入るから、五百圓」
「は、五百圓、もし御買物でも御坐いますれば、猶更ら、お供を」
「うるさいな、五百圓、出せンか、出せなければ宜い」
ことし六十の阪を越せし老の身は、今日なほ殘る昔の大名氣質、疊ざはり荒く其まゝ座敷を出でむとする勢ひに、三太夫、はッと驚いて脚下に平伏、
「御前、暫く、只今、すぐに」
「出すなら早く出せ早く、時間がある」

大名の家に九太夫は禁物ながら、三太夫こゝに三人、内々そッと額を鳩めての評議、

「どうも近來、御樣子が變ッて、まゐりましたぞ」
「さやう、をり〳〵お徒歩で不意に何處へ、お越しになりますかな」
「わけて今日の御樣子は、我々に於て此まゝでは相濟みませンな、外樣は兎も角、御當家に限ッて一切これまで金錢上に、おたづさはりなかッたのが急に、さも待遠に仰せられて、五百圓」
「事に依ると、或は、例の、初音町へでも」
「や、たしかに方角は、あたりましたな、それでなくて、どうも御自身あゝ不意に急な御入用のある筈は御坐いませンな、いよ〳〵さうとすれば、御親子の間柄、萬々お察しは申し上げても、お家に取ッて將來、甚だ掛念に堪へませン、第一また御相續人となられた御次男樣に對しても、お互我々の落度に相成りませう」
「全くの儀で、これは此まゝに置けませン、加之も御總領が、あの通りの御

氣質で、お家柄も何も捨てゝ飛び出されるやうな方ですから、猶更ら以て、うかと出來ませンよ、それに御前が萬事あゝいふ大樣に在らせられて、その上また身分も素性も知れない女が居るとすれば、ます〳〵容易ならン次第で、今後、いかやうな大事が起らないにも限りませンからな」

「過日、郵便の張紙に書いて出した山村キタといふ、その女が第一、曲物かも知れませンぞ、まづ御總領を首尾よく引き付けて置いて、また更に御前を呼び寄せるといふ手段で、事を巧む下種女には得て、よくある業ですからな」

「いや、それのみでなく、さういふ女には必ず影に、わるい附き物があッて、いろ〳〵と絲を引きますから、うか〳〵すれば御親子もろとも、大變な事になりませう」

「つまるところ、その女が災禍の基ですな、何とか致して其女を退ける方法

は、ないものでせうか」

「いや、お待ちなさい、急いては却ッて事を仕損じますから、ゆる〳〵お互に御相談いたして、兎も角も、其女を退治ませう」

あはれ花の露に月の宿れる如きキタ女も、三太夫どもの口の端にかけられては、退治さるべき化物扱ひなり、

門口に俥の停まりし楫棒の音、つゞいて戸を開け、内に入りし足音、をりしも老少の下女に手の放されぬ用を言ひ付けしキタ女、みづから出でゝ見れば、父の廣道、にこやかに、

「また來たよ」

「おや」

無量の尊敬も、無量の有難さも嬉しさも、只この一言に盡きしが生憎、廣行は二階に午睡の夢、鄰席の六疊はあれど八疊の座敷一個、良人を起せば父を待たせ、父を通せば良人を起されず、内憂外患、一時に迫るが如き苦しみ、例の太く濃き眉を寄せて、いよ〳〵張りきる目元に上下を見ながら赧らむ顏、

「どうか暫時、とり散らして居ります」

かけ上りて良人の耳に口、

「お父樣、お父樣ですよ良人」

ゆり起す間もなく抱き起されて、流石の廣行も聊か狼狽の體、坊主枕を抱へながら鄰席の六疊へ遁げ込めば、キタ女、あとに殘りし毛布を突き入れて襖を閉て切り、また下に降りて跪き、

「お待たせ申しあげて、恐れ入ります」

父の廣道、滿面に溢るゝばかりの微笑を浮べながら、人しれず忍び來れば猶更

ら思ひ增して、これ以上の望みも樂しみもない心地に眼を細めながら」

「今日は廣行、居るかな」

「はい、只今」

座を辷りて板間より鄰席へ、出違ひに良人の背後、そッと羽織の襟を折り直せば、見向きもせず其まゝの廣行、父には今年の上野に花以來の今日が始めて、

「お父樣、御機嫌よろしう御坐います、度々お越し下さいましたが、いつも生憎不在で、何とも申譯、御坐いませン」

「はゝゝつい、かうして、ちよい〳〵と來るやうになッたよ、ところで、汝も達者だね」

「有難う御坐います、身體だけは、御覽の通り、相變らず、ます〳〵壯健で」

「えゝこれで乃公の四度、來たね、三度とも汝は居らないが、しかし妻は萬事に優しく行屆いたもので、汝の分まで勤めてくれるから、いつも氣持よ

く歸る」
「幸福もので御坐います、おいキタ、お茶を」
「いや〳〵、さう急ぐに及ばン、今日はね、ゆる〳〵として、何か夕飯を、汝達に御馳走して貰ひたい、俥を歸さう、九段から乘ッて來たよ」
キタ女、鄰席より無言のまゝ降りて、門口に待てる車夫の値を聞き、いふがまに取らせて再び上り來りぬ、
「お俥、歸しまして御坐います」
さらに聲を潛めて、
「良人、御夕飯と仰せられまして」
「むゝ何か、汝、考へてね」
「この邊の、お料理では迚も、お口に」
「さうでないよ、お父樣は汝に何か、せよといはれるンだ、妻は、ちよいと

手料理も致します」
「あら良人」
「はゝゝゝその手料理が宜い、外から一品も取ッては、いけないよ、ありあはす食物で、汝達と同一に喫べよう、はゝゝゝ愉快だね」
どう致しませう、茶器を良人に託し、この一言を殘して其まゝ下に降り行きしキタ女、臺所に入りて裾を引き上げ、白き前掛と襷を手に持ちながら、思はず小首を傾け、さアいよ〳〵世話女房の大役、時も時、わけて折あしく、きのふ今日は近來にない大不漁、
二階には久しぶりの父子、互に膝と膝とは離れても、自然の血は通うて心と心の打解けし物語、
「廣行、當分まだ此まゝ何もせずに、居るかね」
「いや、實は、お父樣、この廣行、かうして居りましても、決して頭腦の中

は、遊ンで居りませン」
「その邊は、乃公も知ッて居るが、やはり氣になる」
「相濟みませンが、こゝ暫時で御坐います」
「しかし全體、どういふ考へで、何をする覺悟だね」
「はい、お父樣に對して別段、祕すべき事も道理も御坐いませンが、御先祖以來の名門に生れて、不肖ながら、じッとさへして居れば長男で立たるゝ筈の身分を、わざと好ンで今日、かういふ境涯になりました廣行は、たゞ華族といふ名譽と體面に縛られる窮窟を脱れて我まゝを仕たいためでは御坐いません」
「それは、わかッてるよ」
「今日のところは只、この點だけ、おわかり下さいまして、それ以上は、お父樣、どうか、もう暫時、いづれ近い將來に於て、具體的に申し上げる覺

悟で御坐います、廢嫡されて家を出ても、松川家の子たるに愧ぢないだけの事は、廣行、きッと御覽に入れます、第一また恐れ多くも皇室の藩屏たる華族には、その仕事の上に華族を去るべき理由のある廣行よりは、陛下の軍人たる弟の廣國が當然の主人となる筈のもので御坐いませう、この點からも松川家は、長男を廢して次男を立てた事に何物の議論を挿む餘地が御坐いませう、お父樣、華族は人生の最も單純にして加之も最も高潔なる職にあるものが嗣ぐべき筈で、廣行の如き複雜の社會に何等か自個の主義を行はンとする人間は、寧ろ華族そのものゝ權威と安泰とを損ずる恐れがあります」
「なるほど、さういへば、さうだね」
「ですから、お父樣、兄の廣行が去ッて弟の廣國が相續する松川家は、華族として最も立派な意味を明白にして居ります、さらに廣行が他の方面で、

もし幸ひに生れた家を辱めないだけの仕事をすれば、兄弟おの〳〵相別れて、その所を得てるでは御坐いませんか、たゞ廣行は今も申し上げました通り、何をするか、具體的に御覽を願へるまで、こゝ暫時の間、此まゝお見遁し下さいますやう」

「よし〳〵、それで猶よく、わかッた」

「ところで、お父樣、思召しは幾重にも有難う御坐いますが、屋敷の才どもは、かやうな理由も何もなく只、お家大切に存じて居りますから、既に廢嫡した廣行の借屋住屋へ、かう度々お越しになりましては、却ッて」

「それは、かまはン、乃公の勝手だよ」

「無論、さうで御坐いますが、やはり當分の間、第一お父樣のため、また過日はキタに、いろ〳〵おみやげを下さいまして、あゝいふ事は猶更ら」

「それでは乃公に今後、こゝへ來るなといふのか、來ては迷惑になるのかね」

「いえ、決して、困りましたなア、お父樣」

「もし汝が面倒なら汝に逢はなくても宜い、妻に逢ひに來る、妻は乃公の氣に入ッたよ、廣行、もし妻を粗末にすると乃公が承知しないぞ」

廣行、則に立つが如く無言のまゝ會釋して其場を遁げ出し、今や臺所に一所懸命の妻が傍。

「おい〳〵まだか、急いで早く出せよ、どうも乃公は、いかン汝に限る、うまく始めは話し込ンで居たがね、ちよいと機嫌を損じた」

「あら、どう遊ばしたンですよ、キタは今これですもの、まだ手が放されませン」

「なアに飯は後でも宜いから汝、ちよいと顏を出せ、どうも乃公なンかと違ッて道中の行列時代に生れた阿父だからね、わかッてるやうで、をり〳〵困る事があるよ、はゝゝゝ兎も角も汝が出れば、すぐに直る」

襷を外し前掛を取り裾を引き下して、髪の毛を撫で上げながら、静に辷り入る額越し、

「只今、御夕飯を差上げますが、此お料理人、甚だ不手際で御坐いますから迚も、お召抱へにはなりますまいと、存じます、ほゝゝゝ」

才色の外、温情の外、これが俗に相性といふものか、父の廣道、音なき春風に誘はるゝ心地、

「はゝゝゝいろ〳〵厄介をかけるね、心配は入らないよ、廣行、どこへ行ッた、彼奴、乃公の來るのを迷惑らしく」

「まア、勿體ない事を、御意に觸りましたところはキタが萬々、おわび致します」

「乃公にさへ、あれだからね、汝には定めし無理な事をいふだらうな、さういふ時は遠慮なく叱ッてやらンと、いけない、第一くせになる」

「では、すぐに今お叱り申してまゐります、ほゝゝ」

「はゝゝゝ叱ッてやれ、叱ッてやれ」

今日のキタ女は上と下との大役、身一個を千々に碎いて、また臺所へ驅け入れば、

「どうだ、すぐに直ッたらう、前世は、汝の家來筋で忠義の盡しやうが足らなかッたンだね」

「御冗談ぢや御坐いませンよ、折角あゝして入らッしやるのを良人、何と御心得あそばすの、迷惑さうに」

「こりやア遣り切れない、上下の夾擊だ、はゝゝゝ」

今日だけは汝達、わたしを助けておくれよといふ優しき言葉の下に二人の、下女を隙間なく諸方へ走らせ、時は五月の季節、筍、蕗、蕨、ほそね大根、鶯菜、この五品を膳に整へ、一切の魚類を避けて差出だしぬ、

茶の心得はキタ女に取りて第一の藝、自然に會席の手筋ありて、まづ父の前、良人の前、その身は亭主役を兼ねた給仕人、廣道、一目ちらと膳部を見て、

「これは、なか〳〵お手際、うれしい御馳走だね」

「まことに、不加減で御坐います」

「どこやら不味公の俤がある」

「恐れ入ります、良人、お招伴あそばせ」

「廣行、いろ〳〵心得のある妻だね」

「ところが、お父樣、廣行には、いつも出來損ひのフライとかライスカレー

とか、いやにバタ臭いものばかりで、かういふものを食はしてくれません」

父子夫婦もろとも三人、おもはず聲を揃へて、どッと一時に笑ひ出しぬ、

金屏風の内に生れて、儀式めいたる家風に育ち、ことし六十の阪を越ゆるまで出入ともに函詰の如き身が、我子の假住居に誰憚らず打寛ぎ、優しく哀れげの

妻に心づくしの夕餐を給仕され、かゝる事は始めての廣道、箸を取りながら三人ともに思はず笑ひ崩れし樂しさ、うか〳〵すれば父も屋敷を出で子爵を捨て、此まゝ此家の舅になりた氣なり、

夕餐も終りて、食後の茶も濟みし後、廣行、頻に軒端より空を見上げながら、

「お父樣、もう遲くなりますよ」

「汝は默ッて居れ、乃公は歸る時に歸る」

「ですがね、屋敷で、また心配いたしませう」

廣行に見向きもせず、キタ女に向うて微笑を浮べ、

「今日は、忙しい目をさしたね、今度、來る時は何處か外で、乃公の方が御馳走しようね」

「はい、ありがたく、お供を致します」

「少し東京を離れて、どこか景色の好い料理屋があれば、考へて置いてくれ」

そろ〳〵市外へ遠出の氣、夫婦おもはず眼と眼を見合はせど、それを唯一の樂しみに我身を起せし父、

「近來にない、ゆッくりとしたよ、では歸る、汝は廣行そのまゝに居れ、妻が送ッてくれる」

わざと我子を其場に置いて、送り出だせしキタ女を振返りながら、そッと一封の紙包、例の五百圓、

「廣行にいふな、これはね、汝に何が買ッてやりたいが、乃公に、わからないから」

戻しても取る筈なく、たゞ無言に泣いて押戴き、門口まで送り出だすや否、忽ち引返して二階へ駈け上り、

「今日は良人お見送り遊ばせ、いゝえ、もう御機嫌は直ッて居ります、お屋敷の御近處まで、暮れますからね」

前後二臺の俥を飛ばして番町の角まで父を送り屆け、その身の歸途は電車、ぶら〳〵と白山前より歩みて、歸り來りしは夜の七時過ぎ、

廣行我家の門口に近けば、頻に二階を見上げ階下の入口を差覗く宵闇の人影、黑く動いて、

づか〳〵と不意に進み寄るや否、はッと驚いて遁げ出す途端、慌てゝ小石に躓きしが、ばたりと倒れし上より押へ付け、ぴしやりと雙手のステッキに打たれぬが此奴の僥倖、

「こらッ、ささまァ何だ」

「は、恐れ入ります、どうか」

「おやッ、杉浦ぢやァないか」

「は、は」
「何しに來た、まさか廢嫡の乃公に御機嫌うかがひでもなからう」
其まゝ引き起せど、肩口を摑みし手は放さず、普通の若殿樣でない實は自慢の腕力、
「まア兎も角も家へ這入れ、番茶でも飲ますよ」
「いづれ、あらためて、伺ひます、どうか此まゝ」
「いや、放さない、折角こゝまで來て、ささま、さういふ挨拶があるか、是非とも這入れ」
さらに大喝一聲、
「來いッ」
何事かと耳を澄ませしキタ女、今の大聲に驚いて駈け出し、
「良人、どうなさいましたの」

「今ね、乃公が歸ッて來ると此奴が門口に、うろ〳〵して居たから取ッ捕へた、こりやア屋敷の家來で杉浦といふ奴だよ、こら這入れ」
無理に引きずり込まれて二階へ押し上げられ、顏へながら片隅に居縮めば、冷かなる微笑を浮べし廣行、
「おい杉浦、ささま、世間しらずの小さい古い頭腦で、をかしく妙に變な忠義立を考へ出しちやア、いかンぞ、すべて世の中が廣く大きくなッて、今日は昔の大名でない、たゞ華族といふだけのこッた」
「は、は」
「たとひ昔のまゝの大名にしたところで、まだ杉浦、幸ひ松川家には、ささまが夜、人の家を窺ッたり覗ッたりして忠義立するやうな、お家騷動も何もないぞ」
「は、は」

「はッ〳〵とばかり言はずに何とか返答せい、全體、今ごろ乃公の家を、きさま、どういふ理由で、どういふ必要があッて窺ッた、竊盜に來たとも思はないから安心して、ありのまゝに言へ」

「は、申し上げます、實は、御前が、もし、お越しではなからうかと存じまして、内々、お迎ひ、かたん〳〵」

「どうせ、さういふだらうな、はゝゝゝお父樣が今日こゝへ來られたのは來られたが、内々お迎ひ、そりやァ嘘だ、はゝゝゝお迎ひに來る奴が馬車も俥も廻さずに、きさま一人が何のため内々お迎ひに來るンだ、第一また身を忍ンで猫が肴を取るやうに、あの闇がりで、あンな、お迎ひがあるかい」

「ひらに、何卒、ひらに重々、御わびを申し上げます」

「きさまの考へは、わかッてる、わかッてるが今この乃公は默ッてるから、あまり見當違ひに立騒がないやう今後、よく氣を付けろ」

「は、は」

「いくら父子の情愛で、お父樣が來られてもね、もはや一旦、家に對して廢嫡の廣行は、家のため自分のため決して屋敷へ再び用がないから、よけいな心配するな、おいキタ、ちよいと來てくれ」

わざと階下に差控へしキタ女、呼ばれて入り來りぬ、

「杉浦、それが乃公の妻だ、お父樣にも度々お目にかゝッて、いろ〳〵御親切にして貰ッてるよ」

化物退治の發頭人は此杉浦、逆さまに生捕られて恐縮の額越し、おそる〳〵見れば瞬眩き絶世の美人、加之も自然に氣高く品位あれど、少しも高ぶらぬ慇懃の挨拶、

「初めて、御意を得ます、キタと申しまする不束もの」

「は、は、これは、は、これは、は」

「まア貴君、お羽織の袖が砂だらけに」
砂だらけの筈なり、門口に捻ぢ伏せられて其まゝ引きずり込まれし杉浦、背を拂ひ袖を拂はれて、ます〳〵恐縮の體、優しく白き手も鬼の鐵棒に打たるゝ心地、さりとて遁げ廻れず、いよ〳〵居縮ンで頻に兩手を宙に振りながら、
「これは奥さま、どうか、此まゝお捨て置きを、は、は」
廣行、笑ひながら莨の煙を吹いて、
「おい杉浦、夕飯を食ッたか、まだなら出してやるぞ、どうだい」
「は、いたゞきまして御坐います」
「こゝへ來る途中で食ッたのか」
「いえ、お屋敷で」
「はゝア、食ふ事は忘れずに食ッて來たンだな」
ぎゆう〳〵いはされて、五十面に膏汗を流し、やう〳〵遁げ歸る出口までキタ

女に送られ、ひよろ〳〵しながら、
「奥様、どうか宜しく、おわびを」

其十一

帝大出身の同窓會員中、あまり名聲嘖々たらず從うて事件も多からざる辯護士連の七八人、
ゆうべ池の端の待合に夜討をかけて、おの〳〵敵の女武者を歸せし今朝、宿醉いまだ醒めざる朝酒に、今夜またいづれへか戰場を變へて再び出陣の評議、
「まづ今日は日曜で、お互に勉强したくッても出來ない日だ、ぼンやり此まゝ暮らしちやア策が無さ過ぎる、どうだ諸君、おもしろい考へは絞れないかね」

「只これ兵站部の一事だよ、武器も戰鬪力も充分、あり餘ッてるがね」
「はゝゝゝあり餘ッてるから困るンだ、しかし此まゝ腴肉の歎に了るのも殘念だな」
「や、諸君、名案あり名案名案、頗る名案がある」
「折角だが君の名案と君の原告に、いまだ曾て功を奏した凡例がない、いつも被告側に功を奏して遺憾なく復從の義務を盡してるからね、はゝゝゝ」
「ところが今日の名案は忽ち言行一致の名案だ、知らずや諸君、この池の端の近くに我々のため豊富なる兵站部があるぜ」
「はてね、どういふ理由だ」
「こりやァ近ごろ田島に聞いたンだが、例の松川廣行ね、あれが居るよ、彼奴、華族といふばかりでなく、學校時代から妙に超然主義を取ッて、其くせ不意に、をり〳〵惡戯けた眞似をする奴だッたが、どうしたのか近來、

廢嫡されて初音町に住ンでるさうだ、加之も君、見遁すべからざる事が二件あるその一は彼、我々と同じ級から出て五年の今日まで、いまだ一度も同窓會に面を出した事がない、但し會費だけ送ッてくるのが生意氣千萬だ、癪に障るぢやァないか、さらに他の一件は、けしからンぞ、たとひ華族は止めても此女ばかりは止められないと、誰に向ッても大びらに惚けるほどの女があッてね、現在その女と同棲に、うき世の風は何處を吹くといふ調子に暮らしてるさうだ、過日、久しぶりで田島が逢ッた時も、のろけ交りに誇大忘想狂のやうな怪氣焔を吐いて、我々この同窓會を罵倒するに、ありやァ世の中に狼狽へて集まッたどうしよう會だと吐したさうで、田島ア僕に眼を剝いて憤慨して居たよ」
「そりやァ聞き捨てにならンぞ、初音町の何番地だ」
「番地は聞かなかッたが、なァに直ぐ分るだらう、たしか山村とかいふ女名

前だと言ッた」

「おもしろい、その罰金に引ッ張り出して、うンと奢らしてやらう、我々八人で包圍すりやァ遁さない、いくら彼奴だッて、まゐるよ、この中で誰か使者に立たないか」

「いや、わざ〳〵使者を立てるより俥で迎ひにやる方が宜いね、手紙を持たして」

「手紙は、無效だ、いけない、遁げるにも、斷るにも自由だから」

「たゞ手紙ぢやァ無論、無效だよ、しかし我々八人の連名で、もし來られなければ押掛けて行くといふ文意さ、ね、さういふ女と小意氣に洒落てる中だ、押掛けられて堪らないから嫌でも、やッて來る、來れば占めたり、もう此方のもンで、袋の鼠、釜中の魚だ、はゝゝゝ」

「決定決定、それに決定した」

「さし當ッて書記は誰だ」

「書記は酷いが、この中での文章家は僕だよ、この通り考へなくッても筆を取れば、さら〳〵と卷紙に音するばかりで、かういふ工合だ、早いだらう」

「なるほど筆は早いが、意味は通じてるかね」

「默ッて、默ッて、さァ出來た、此まゝでも宜いが念のため一應、觀進帳で讀み上げるよ、拜啓、爾來久敷御無音に打過ぎ候へども時下ます〳〵御清適の段を承知いたし候と共に庇ながら艶福の御近狀また羨望の至りに不堪候、ついては我々八人こゝに小宴を相催し候間萬障御繰合はせ御來臨下され間敷哉、もし外出御差支御坐候はゞ、我々當方より打揃ひ拜趨可仕候、どうだ、うまからう、もし外出御差支といふところは前の艶福云々に照應して、全文の骨子こゝにありだ、我ながら名文だな」

「はゝゝゝあまり名文でもないが、まアそれで宜いとして、すぐ車夫に持た

してやらう」
「しかし置きッ放しでは、いけないせ、その俥へ本人すぐに乗ッて來ないとすれば、兎も角も返事を取ッてくるやうにね」
「無論だ、ところで、どういふ返事が來るだらう、面白いね、こりやア愉快だ」
池の端より初音町まで車夫の脚に往復の時間、三十分も要せず歸り來りしが、果して空俥、されど女中の取次ぎし返書に、八人おもはず膝を乘り出して見れば、洋紙にペン先の走り書、
久々にて諸君の御手紙を拜見いたし候、早速推參の筈なが元來の大下戸は、却ッて折角の御酒宴に座興を破るべく候、また打揃うて御尊來の節は目下の借屋住居に二階下四疊半の客室と御承知下されたく候、但し久濶の友情その後の高說も承りたく候間もし御晝飯の席を小生に御任し下さ

れ候はゞいづれか他に御用意可申上候、折返し御返事まち入候
八人の内、三四人は思はず互に顏を見合はせ、あとは我しらず腕を組ンで首を捻りながら、
「どうだい、この返事は、何だか妙に此方が、やられたやうな氣がするせ」
「つまり下戸だから酒の場に行かない、もし八人で來るなら來ても宜いが四疊半へ押込むぞ、しかし晝飯なら奢ッてやらうといふンだ」
「加之も折返して、すぐに返事しろは、けしからンね」
「かまはない、やけだ、八人で四疊半へ坐り込ンでやらうぢやないか」
「此方は坐り込ンでやッた覺悟でも、向うは押込ンだ覺悟で居るよ、第一それで食はず飲まずに奴の氣焰を聞かされたり、ちら〳〵女の影を見せられたりして、たまるかね、はゝゝゝ病氣になるせ」
「全くだ、警察で拘留せられた方が寧ろ優勝だ、あきらめが付くよ」

「しかし何とか返事を仕ないと、此ま〻ぢやア敵の逆襲をうけて凹垂れたやうなもンだ、藪蛇に驚いて尻餅を搗いたと一般だぜ」

「いッそ彼奴のいふ通り、どッかで、うンと贅澤な晝飯でも奢らしてやらうか」

「殘念ながら僕なンかア昨夜以來の酒びたりで、この二日酔に、さうは食へないよ、もし彼奴のこッたから意地わるく、こて〳〵と眼前へ洋食でも出されちやア、殆ど責苦だ、むか〳〵して嘔くね」

「おい文章家、つまり君の名文が失敗の基たぜ、久しぶりで舊情を暖めたいとか何とか敬意的に先の遁れッこないやうに書けば宜いものを、我々八人こゝに酒を飲ンでるとかつまらない、艶福云々と外出云々の照應なンかするから無效だよ、現在この返事を睨ンで八人が腕を組ンだ工合、よほど先の方が名文だぜ」

「味方の同士討は禁物だ、名文爭ひは偖置いて、さし當り多數決で返事することに極めよう」

「どう極める、返事の遲くなるだけでも彼奴に内兜を見透かされる理由だ」

「かうなると、考へるほどいけないよ、上策は策なしで、ざッくばらンに現ナマの無心でも吹ッかけてやらうか、露骨に、むきだしに、昨夜からの勘定が足らないから幸ひ近くの君に一時の立替を賴むとね、どうだらう、一人で眞面目に金の事は面白くないが、八人こう揃ッて待合の勘定だけに却ッて罪がなく聞えるぢやアないか」

「寧ろ天眞爛漫で、それも宜いが、彼奴また天眞爛漫に、はッきりと未練氣なく斷ッて來た時は、どうする、いよ〳〵拙いせ」

「さう君、消極的に考へ込ンぢやア我々八人、謝罪に行くより仕方がないせ、はゝゝゝ」

「兎も角も百圓、ぶッかけろ」
「賛成賛成、しかし今度は文章家の名文、無效だ、僕が書く、書く前に諸君の同意を得て置くが、まづ、かういふ文句で宜からう、委細は拜眉の上、
「さし當り金百圓、我々八人の馬鹿遊びに不足を告げ候一時御立替下され間敷哉、どうだ」
「よからう、ぐづ〳〵いはないで、委細拜眉の上は簡にして明なりだ、まさか來る事も出來ない金もないといへまいよ、現に晝飯を奢るといふくらいだからな」
また車夫を初音町へ走らせば、額を鳩めし八人の相談と違ひ、一人の即決即答、すぐに來りし返事は、同じ洋紙のペン筆、
百圓の金子は何時にても御坐候間御安心なさるべく候、但し委細拜眉の上と御坐候故お目にかゝりて御渡し可申上候

八人また一本まゐられた顔色、
「いかンね君、簡にして明なりと思ッたが、やはり委細拜眉の上が惡かッたよ、かうなれば仕方ない、誰か拜眉に出掛けて來るンだな」
「百圓の一人占なら隨分、拜眉に出掛けるが、八人等分ぢやア出掛ける奴が、つまらない」
「書いた本人が拜眉の責任あるだらう」
「いや、豫め諸君の同意を得て書いたぞ」
「闇引闇引」
「なアに、もう意地だ、野郎、我々を馬鹿にしてるところがあるよ、今更ら後へ引けないぞ、出來ても出來なくッても構はない、うるさく絶えず此處と初音町の間を往來して魂くらべに手紙と返事の取りッこをするンだ、もし先も意地で夜になりやア猶更ら面白い、此方の城は夜あかしの待合家業

で敵は素人家だ、まして好きな女と早く寝たい宵からの戸締りを、ゼンゼン割れるやうに叩き起すンだ、はゝゝゝあらためて脛ッ節の達者な車夫を一晝夜、抱へ込まうぢやないか」

「やるべし、やるべし、數に於ても一人と八人がゝりだ」

「ところで早速、今度は、どう書いてやらう」

折しも階下より女中の取次、みれば初音町よりとして、今までの洋紙とは封筒までも違ひし狀袋、

「おや、來たぜ」

「來たらしいね」

「流石に何とか、考へ直したンだらう」

「そりやァ君、いくら彼奴だッて、我々こゝに八人も酒の勢ひだもの、考へ直すよ、どうせ叶はないと思ッて、急に封入して來たンだな、はゝゝゝ」

「かはいさうに、罪だッたね、兎も角、すぐに禮狀の一本も出してやらうぢやないか」

「實は此方だッて、この上、意地になりたくなかッたよ、公平の眼で見れば曲直いづれにありと問ふに及ばないンだからね、はゝゝゝ」

その一封を開けば、なるほど洋紙のペン先と違ひ卷紙の筆太に墨くろ〳〵、

只今の御手紙うかと致して、我々八人馬鹿遊びの勘定不足といふ一節を讀み落し候、折角ながら今日の境遇いまだ諸君の馬鹿遊びに應ずべき馬鹿金の用意これなく候間あらためて斷然おことはり申上候、金も他人の馬鹿尻を拭うて有餘るほどになりたきものと大に奮發心を起し候

あッといふ聲も出ず、たゞ茫然として八人の呆れ顏、されど此まゝ無言の呆れ顏を並べても居られぬ場合、

「畜生、ふざけ過ぎた事をする奴だ、どうだい、この文句は、同じ斷るにも

始めの一度で濟む事を、わざ〳〵前後二度に割ッて入念に來やァがッたせ、我々八人も揃ッて彼奴一人のため、こゝまで翻弄されりやァ澤山だ」

「もはや惡戯でない、喧嘩を買はれてるンだぞ」

「喧嘩となりやァ諸君、手紙や文句より單刀直入、その覺悟で掛らうぢやァないか」

「だから始めに僕の說が一番だ、四疊半でも三疊でも、この八人で押掛けて坐り込むに限るよ」

「や、待ッた、いよ〳〵喧嘩となれば、猶更ら多勢が一時に押掛けて、うかうか坐り込めンぞ、彼奴も法律の頭腦だからな」

「實に殘念だな、いち〳〵機先を制せられて仕舞ッた」

「諸君、兎も角も僕に一任し給へ、これから彼奴を訪うて直接、僕が解決を付けて來よう、此まゝぢやァ引くに引かれず進むに進めず全く我々の立場

がない、彼奴だッて行掛り上、かうなッたもンの、まさか心持よく思ッては居ないさ」

「しかし君、我々の意地を沒し體面を損じてまで、屈辱な和睦は出來ンぞ」

「大丈夫、うまく行けば、笑ッて連れて來るよ」

全權委員の一人、いかにも心算あるが如く、自己の胸を叩いて降りしが、門口より俥の駈け出せし音もなく、また元の二階へ上り來りて一種異樣の妙な面、

「どうした君、まだ行かないのか」

「おい諸君、怒ッて宜いか喜ンで宜いか、迚も叶はないよ、僕が今この下へ降りて行くとね、女將が出合頭に只今この御勘定が濟みましたといふから、ふしぎに思ッて聞くと諸君、やられた、やられた、昨夜からの總計六十七圓幾何といふところへ百圓紙幣一枚を置いて、あとは茶代だ、もし二階で彼是いへば金は其まゝ預ッて置いて別に二階から貰へと、さう言ッて今そ

こへ出たさうだ、松川奴、そッと階下まで來やアがッたンだ、障子を開けろ開けろ、まだ其邊を歩いてるかも知れない」

二階の障子を開けて見れば、一目に池の端の二十間あまり先を、のそり〳〵と歩む廣行、振返りて帽子に手をかけながら、

「やア失敬」

八人おもはず我を忘れし會釋の面を並べて、一時に押へ付けられた形狀、これが百圓の生きた玩弄具とは、廣行の心中、物價騰貴の今日に天下の至廉なり、

其十二

今日は何處へか、まだ歸らぬ良入を待ちわび我身の用もなくて、夕ぐれ近き門口に立出でしキタ女、

みどりの若葉、いつしか上野の森に濃く茂りて、その隙間より暮れ行く空の紅き横雲に射られ、我しらず照り返さるゝ美人の顔、大理石の名作に薄紅を刷けるが如く、ます〳〵際立ちて冴え渡りぬ、

酒は煮物の酒鹽と味淋の外に用なけれど、味噌醬油を重に出入の酒屋小僧、に〳〵と十四五の愛嬌もの、三升徳利を提げて前を通りながら、小腰を屈めし途端、物に追はれしか横合の垣根より犬に飛び出され、はッと驚く脚下、ひよろ〳〵と前に倒れかゝりし溝石の角、叩き付けたる如く徳利は微塵に割れて、加之も小僧は俯せしまゝ兩手に固く足の拇指を掴みぬ、

キタ女、おもはず駈け寄りて、

「どうかしたの」

「割ッちまひました」

「いゝえ、お酒よりも足を、どうかして」

「ヘエ、足なンか、どうでも宜うがすが御注文の三升、たゝ大變な事しました」

「あら、血が出てるよ、まアおいで此方へ」

手を放せば生爪を剝ぎし黑血に、キタ女は眼を瞠りながら臺所へ連れ込み、二階より葡萄酒を持ち來りて疵口に注げば、下女も小僧も一時の驚愕、

「まア奥さま勿體ない」

「水で洗ひます水で、ヘエ」

「さうでない、これで洗ッて置くと直に宜くなるよ、汝そこの手拭でも割いておやり、かはいさうに、まア痛からうね」

小僧の身として冥加に餘れど、實は足の痛みより注文の酒三升に半泣きの澁面、

「あの、お酒は何處かの注文だッたのかね」

「ヘエ、この横町へ、とンだ事をしました」

「家へ歸ッて困るだらうからね、あれは當家で取ッた事にしてあげるよ、門を通りがゝりに呼び込まれたから置いて來たと言ッて、すぐまた注文の分を持ち出せば宜いだらう」

「おゝ奥さン、あり、有難う御坐います、家の旦那ア嚴しくッて、私は去年、廣島から來たばかりのもンで、どうしようかと思ッて居ましたので、奥さン有難う御坐います」

この小僧、半泣きの嬉しさに、廣島といへる一語は、人しれぬ異樣の音響を傳へて、キタ女の耳に針を刺すが如く聞えぬ、

緣日の露店に賣る草花さえ、どこに生れて何の種といふ事は知らるゝ筈を、淺ましや人としての我身、いづこに生れて誰の種に育ちしやら、